

物語中村史

編上原祥男

この「物語中村史」は、歴史の流れを楽しく知ってもらいたいと思って、編集したものです。

古い時代から、中村に人が住んで生活していたことは遺跡や遺物からはわかるが、その人々の生活の記録が全て残っているわけはありません。そこで、遺跡や遺物当時のいろいろな記録を基にして、できるだけ歴史の内容を正しく書き、一つ一つの物語がそれぞれのまとまりをもつようにし、一話を見開きの二ページの中におさめ、二〜三枚のカットを入れ、また、会話を入れることによって、固くなりがちな歴史を、読みやすくしようと思つて組み立ててみました。

この物語を編集するに当たって、三通りの方法を使いました。一つめは、遺跡や遺物を基にしたもの、二つめは、中村に伝わる伝承を基にしたもの。三つめは、当時の記録を基にしたものです。ですから、物語の中の登場人物は、創作の人名、伝承の人名、実在の人名とさまざまですが、ここに書いた内容は、その人物の時代の様子を調べたうえでの創作であり事実でもあります。

一〜六話までは、遺跡や遺物を基にして、当時の生活を想像したものです。第一話は、寒冷期の旧石器時代に人間が食べ物を手に入れるための努力から、道具の改良

を考えついたこと。第二話は、温暖期の縄文時代の生活の様子と山の神と人々の結びつき。第三話は、弥生時代の米づくりを通して、食生活の変化と鉄器の使用、そして、山の神、田の神の祭りなどの様子。第四話は、小集団から大集団への変化を鉄器の貸借という関係でとらえた（原島礼二氏の「古代王者と国造」も参考にした）。第五話は、古墳時代の田畑の拡張を「常陸風土記」を資料として、志田淳一氏の「風土記の世界」の考え方を参考にして書き、古墳づくりを通して全国的な結びつきができたことに考えました。第六話は、中村連という伝承人物を、中村八幡宮の後ろの古墳に埋葬された人物として考え、田畑の拡張を「常陸風土記」にある大和朝廷の役人の考え方を加えて、五話とのちがいを出しました。

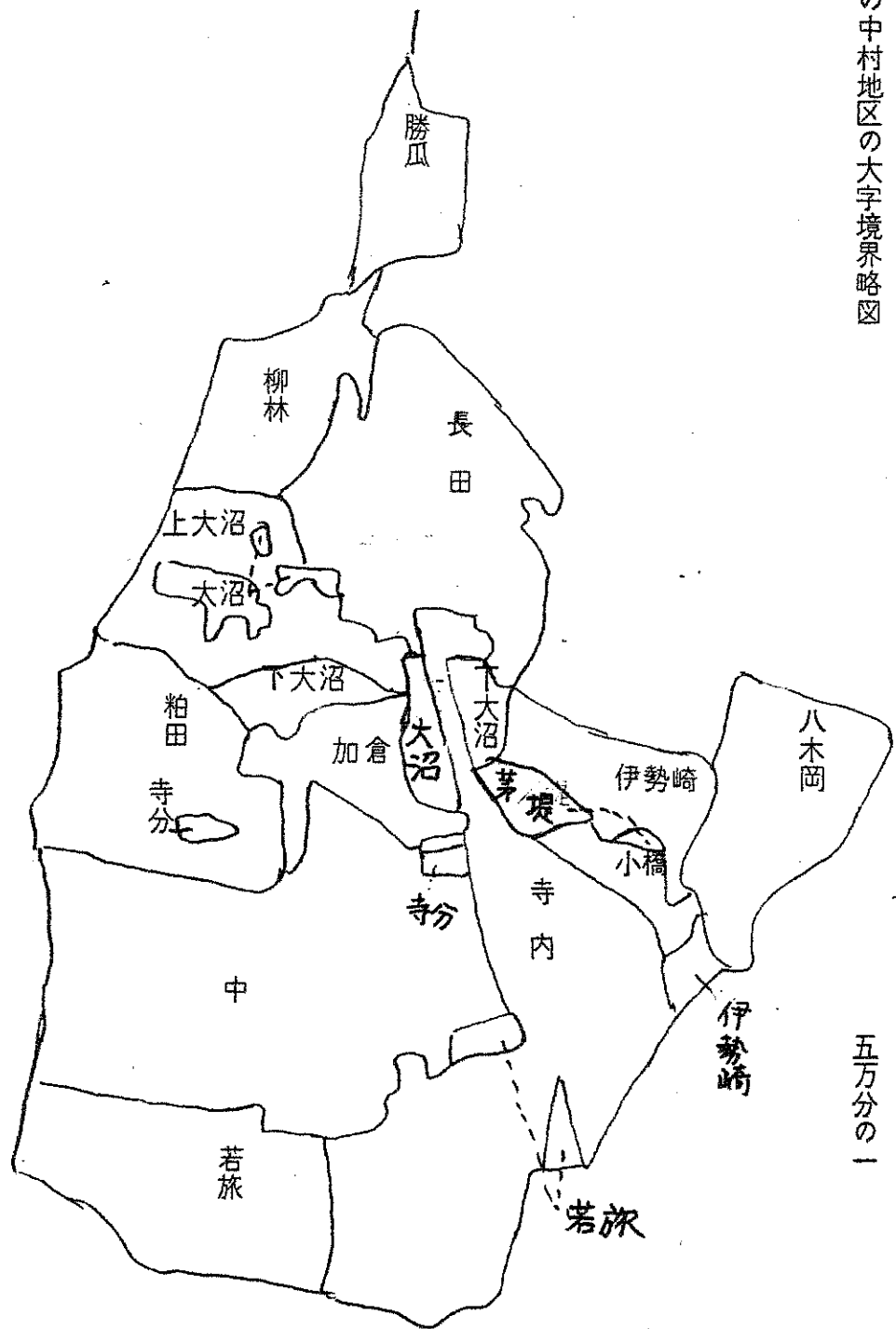
七〜九話までは、記録を基にして、中村の住民を創作したものです。第七話は、「万葉集」の中にある、下野国の防人たちの歌から、防人たちのいろいろな感情を書いてみました。ただし、君子部のヒルマロは創作の人名であり、ヒルマロの歌も未勅国の防人の歌、五五六九を使用しました。第八話は、「類聚国史」の中にある節婦から、婦人の墓は「光明寺節婦の墓」として若旅にあります。第九話は、「権記」「小右記」「御堂関白記」に書かれている、下毛野公時を中村の住民にして創作したもので、道長の権勢の経済的な支えである荘園の

入手方法についても想像して書いてみました。

十〜十九話までは、中村荘の支配者であった中村氏と近隣の諸将との関係を伝承や記録を基に創作したものです。第十話は、中村氏の中村荘への移住という伝承を基に、「伊達家系譜」や古文書によって編集するとともに、保元の乱にも触れてみました。第十一話は、「吾妻鏡」にある中村氏の記録を基に「中村沿革誌」も参考にして編集しました。第十二話は、中村氏を伊達家の祖だとする「伊達家系譜」と中村八幡宮にある古文書を基にして編集しました。第十三話は、「吾妻鏡」にある記録を基に編集したもので、鎌倉幕府の直接の家来である御家人の仕事を集めてみました。第十四話は、「吾妻鏡」にある承久の乱で、伊佐大進太郎の水死という記録を基に承久の乱の原因にも触れてみました。第十五話は、中村経長という伝承の人物を通して、中村氏の中村荘からの移住の理由や、南北朝期の関東における両党の戦いを書こうとしましたが、資料が多過ぎてよく編集できなかつたかも知れません。第十六話は、中村荘の地頭職となつた小栗家と、伝承の人物の中村政国を通して、関東に起こつた禅秀の乱の様子と関東武将の動きなどを編集してみました。第十七話は、中村政国を通して、結城を中心起こつた永享の乱と原因、各武将たちの動きを編集してみました。第十八話は、古河公方となる成氏と関東の諸

將の動きを編集するために、伝承の人名の中村政保を登場させました。第十九話は、「水谷系譜」「結城系譜」「宇都宮興廃記」「関八州古戦録」「水谷軍記」を基にして、中村城の落城の時期を推定してみました。

二十〜二十五話までは、中村にある古文書を基に創作したものです。第二十話は、検地によって領主が年貢を確保しようとしているときに、農民がどのような考えをもっていたかを当時の記録から推定しました。第二十一話は、「慶安のお触れ書き」と言われる幕府の農民対策の法令を基に、農民の生活を編集してみました。第二十二話は、農民にとって大切な用水を確保するために、どのような結びつきをしていたか、また、仕事の面ではどのような割りふりがなされたかを想像してみました。第二十三話は、年貢の決定の一つの方法である「検見」と納入の方法を通して、中村の河岸にも触れてみました。第二十四話は、農民にとって大きな負担であった助郷を將軍吉宗の日光社参という事実を基に想像してみました。第二十五話は、天明のききんに関する「海潮寺文書」を基にして、思い出ふうに編集するとともに、幕府の天領の農民に対する政策と、ききんの時の農民の生活を創作してみました。



目次

一	食べ物をさがして	1	十三	御家人の仕事	25
二	土器づくり	3	十四	御家人の結束	27
三	米づくり	5	十五	伊佐(中村)経長の活躍	29
四	ムラからクニへ	7	十六	小栗氏の滅亡	31
五	大きな墓	9	十七	中村家の再興と没落	33
六	部民(べのみ)のたみ(たみ)から公民へ	11	十八	足利成氏と中村荘の人々	35
七	防人(さきもり)に行った人	13	十九	中村城の落城	37
八	吉弥侯部(きみこべ)道足の娘	15	二十	検地―縄入れ	39
九	武士のおこり	17	二十一	慶安のおふれ書き	41
十	中村朝宗と子どもたち	19	二十二	用水路の修理	43
十一	奥州藤原氏攻撃	21	二十三	年貢の決定と納入	45
十二	朝宗は伊達郡の地頭に	23	二十四	日光社参と助郷	47
			二十五	天明のさきん	49

一 食べ物やさがして

ここは、五行川から五百メートルほど西の台地の南のはし、今の八木岡のおみやといわれるところで、今から一万年以上も前のことです。

後ろの台地にはカラマツ、フナ、シイ、イチイなどの木がおいしけり、前の低地には草原や沼があちらこちらにありました。

台地のすそのくぼんだ所にはうちがたっています。うちは、三本の木を柱にして草やけもの皮などを屋根にしたもので、うちというよりも、ほったて小屋といったほうがいいような、小さくてそまつなものです。

そのうちの前で、母親と子どもが火を見守っている。

「チコ、かれ木をさがしてきて」

母の声でチコは後ろの台地に木をさがしにいった。火がもえているとクマにおそわれたいし、あたたかくて明るいからです。

かれ木を運んできて火に入れ
「おっかあ、今日は、えものがあるかなあ？」

「わからない。ちかごろは、めっきりえものがすくなくなった



というからね」

母親の声もあまり元気がありません。

「おーい。おーい」

遠くの方で人のよんでいるような声がします。

「や、帰ってきたらしいよ」

声のする方へかけ出したチコは、おとなたちがほうをかついてくるのを目ざとく見つけました。

「えものがあつたぞー」

と、どなった。うちの中から子どもが飛び出してきた。えものは一頭のオオツノシカでした。

「きょうはひどくつかれた。一日中あっちこちと歩きまわってもえものがない。それで、帰ろうとしたら、これにぶっかった。やりに当たってもたおれない。それで、みんなで追いかけたが足が速くて追いつかない。や」とこ、これをしとめられた。冬が近いのに、一頭じゃあしょうがないな。でもひさしぶりに肉が食える」

みんなが集まると、石のナイフでシカの腹をさき、石の皮はぎて皮をはぎました。そして、みんなに肉が平等にくばられました。たき火で肉を焼くと、油がじゅうじゅうとにじみ出て、うまそうなおいが、あたりに広がります。みんなは、ひさしぶりの肉をゆっくりと味わうように食べました。

おじい、おとなたちに

おとうたちにたくさん食べ物をとってきてもらうんだ」と、あしたからの仕事を考えているうちに、ねむってしまった。

「こんな打ちかいただけの石やりてはだめだ。もっと石の先をとがらせなくちゃ。おのの刃ももっときれるようにしなくちゃだめだ。おまえらは狩りに力を入れる。おれと大きな子どもたちは道具づくりだ。女たちは川に行つて、できるだけたくさん魚や貝をとれ。小さな子どもは木の実集めだ」と、言った。



「そうだ、そうすれば、おらあたちみんなて、冬が越せるぞ、春までの食べ物を集めよう」と、チコの父親が言った。みんなも

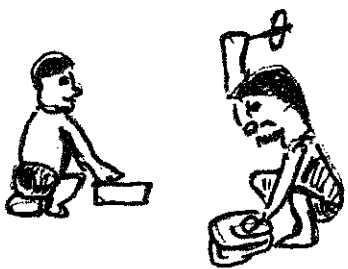
「そうだ、そうだ。みんなであしたから食べ物集めだ」食事が終わると、みんなはひさしぶりの肉の味を、もう一度かみしめるようにしてたき火をはなれて、それぞれのうちにもぐりこみました。

チコは、あしたからおじいの道具づくりを手伝うことを考えながら、けもの皮にもぐりこみました。地面がまた、ぐらぐらと動いています。

「ようし、おじいと道具づくりを、いっしょうけんめい」にやっつて、一発でたおせるようにとがらせるぞ。それで、

このころは、おじいさんを中心に、その兄弟や子ども孫たちだけの血のつながった者たちだけの生活（氏族社会）だったので。食べ物は、シカ、イノシシ、クマ、野牛、ウサギなどの自然に住むけものや川の魚や貝と山の木の実や草の実や根でした。だから、たくさんのお食料をとったり集めたりできないと、いっとうえ死するかもしれないという不安な生活でした。

真岡市内では、東大島の磯山からこのころの石器がたくさん見つかっています。それをもとにして、書いてみました。ほかに、亀山の猿山、台町の真岡小学校校庭、南高岡からも石器が発見されています。このころを旧石器時代とか先石器時代とよんでいます。



二 土器づくり

ここは、鬼怒川の東約一・五キロメートルの長田の山王で、南は低地で北と東は台地になっている。今から三千年ぐらい前のことです。

台地には、クルミ、ドングリ、トチ、クリなどの木があり、シカ、イノシシ、ノウサギ、アナグマ、タヌキなどの動物が野山を駆けまわり、キジ、マガモが飛びかっている。

台地のはずれのたいらなところには、広場を囲むようにうちがたちならんでいます。うちは、地面を少しほってゆかにし、数本の柱を立て、その柱に横木をつけて屋根をふきやすいようになん本もしばりつけてあります。屋根は、近くに生えているかやてふきます。うちの中央には石で囲んだろがあります。うちの前では、女たちが土器づくりをしている。山からとってきた



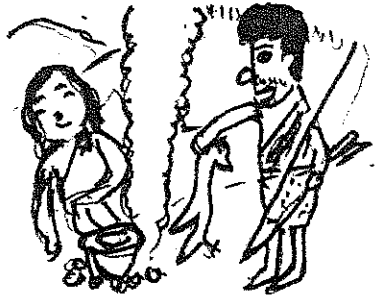
たねん土をよくねってから、ねん土の長いひもをつくる。それを、下からぐるぐると巻くようにして、だんだんと大きくしていく。つくりたい大きさになると、竹のへらで、内側と外側をなでてすきまをなくす。つなぎめには水でとかしたねん土をよくすりこむ。形ができあがると模様をつける。草を煮んだなわで、外側をころがすようにしてなわめの模様をつける。横側ができあがると、口のところのかざりつけた。木や竹べらを使ってかざりをつける。できあがったものは、うちの北側に運んで、かけほしにしてかわかす。たくさんできあがると、土器をならべ、まわりに木や草を積みあけて焼く。

男たちは、弓矢・やり・石おのをとりだして、矢の先ややりの先がしっかりとついているかどうかを調べて、犬を連れて思い思いに山に狩りに出かけて行きました。今日は、個人別の狩りの日なのです。

子どもたちは、クリ、クルミ、ドングリ、トチの実などをひろいに林に行きます。シカの皮のふくろを、いっぱいにして帰ってくると、それを広場にあげては、またひろいに行きます。

むこうには、石おので切りたおした材木をたてて、それにフジづるをはった干し場があります。これは、シカの骨でつくったつり針でつってきた魚や、もりでとった魚や、あみてとった魚を干すためのものです。

その日、フトヒコはキジをいとめて帰った。ホソヒコはウサギを投げやりでとった。そのほかの男たちもそれぞれ得意の道具を使って鳥やけものをとった。個人別の狩りは、集団で狩りをするときの持ち場をきめるときの大切な資料になるのです。シカやイノシシのような大きなものは、持ち場をきめてとらないととれないからです。



集団狩りのあった夕方です。みんなが大きなたきびのある広場に集まります。きょうのえものを、みんなで分けるからです。

おばあさんは、女の姿をした人形を石だんの上にかざり、なにかプツプツ言いながらのっています。これは今日のえものをくれた山の神様にお礼を申しあげるとともに、明日もたくさんえものをくれるようにいのであるのです。そして、男たちが狩りをしているあいだ、守ってくれるようにたのんでいるのです。

狩りに行った男たちが、今日の話を始めた。「フトヒコ、おまえもずいぶん弓がうまくなったな。にけるシカを一発でしとめるんだから」

「そうじゃねえ、矢にきのうとったキジのはねをつけたんだ。そうしたらまっすぐにいくんだ。それにしても、ホソヒコの勇氣にはたまげたな、向かってくるイノシシをやりてしとめるんだから」

「うまくいっただけよ。イノシシが頭をあげたので、出したやりのどにさざり、イノシシの勢いでしりまいてちまっただけさ」

みんなが、おたがいにほめあいながら、木の実で造った酒を飲みはじめた。えものは、石のナイフで皮をはぎ肉をそいで石のさらで調理してみんなにくほります。女たちは夫の話を聞きながら調理している。あまった肉は家ごとに分けます。家に帰って、ろばたにつるして干しにします。皮は干してから、骨でつくったぬい針でぬいあわせてきものにします。角でかざりものを作ります。

クリやクルミはうちのそばにはあったあなにためておきます。ドングリは、石うすと石ほうで粉にして水でさらして干し、粉をこねて焼いて食べます。



ここは、鬼怒川から一キロほど東の台地、今の間木堀に住む人々の田で、今から千八百年ほど前のことです。秋に入ってから、ずっと晴天が続いたせいか、いつもの年よりもほの曲がり大きい。今年の稲のできぐあいは、ムラ始まって以来のことであろう。

それは、ムラのかしらに言いつて、アシヤマコモの根をほりおこし、浅い所の土を深い所に入れたり、山から何百本もの木を切りたおして、腰まで水につかりながら打ちこんで、水をためる所と水を流す路を作ったので、木のくわやすきて土を深くたがやしたり、水を入れたり出したり自由にできるようになったからだ。それができたのは、ムラのかしらに、鉄のおのと小刀を手に入れることができたからだ。また、そのあとも、ムラのかしらの言いつけて、雑草をぬいたりして田をよくしたからだ。今日も、山や川にえものをとりに行った男たちを送り出したあと、女たちは平らな石をみがいて作った石ほうちょうで、ほをつみとっていく。

「一本一本とるのは大変。かし



らが持っている小刀があれば、一度にたくさん切れるのにね」

「でも、鉄を手に入れるには、たくさん米か、毛皮か魚などでなけりゃだめだそうよ」

「とり入れがすんだら、山に行ってフジづるや山がいこを、たくさんとろう。今年みたいに天気の良い年には、山がいこがたくさんできるから、それでよい布を作らにあ。暑いときには布のほうがよいから」

「わたし、きれいな石を夏にいっぱいひろったんで、首かざりや耳かざりを作ろう」

「そうね、ここ二年間は、田作りでそれどころじゃなかったもんね。みんなよいものを作ろうね」

と、いろいろと冬の仕事を話し合いながら、一本一本つみとっていく。じょうずにつめない少女たちは、はこび役だ。ずっしりと重みのあるカゴを頭にさせて、たのしそうに運んでいく。去年は雨が多くてひざまで水があつたし、おとしは雨が少なくてほが軽く、やっと思んががおかゆにしてすすったり、クリやドングリの実、けもの肉などでがまんしたからだ。みんな、こしきてふかした歯ごたえのある飯を考えているのだろう。来年からは水の心配がなくなったからだ。

運ばれた稲たばは、家の前のむしろの上でかわかさされる。子どもたちは、しつこくよってくるニワトリを追

はらっている。かわいた稲ほは、床を高くした倉庫に運びこむ。

「このぶんだと、倉をもう一つ建てなければならぬかな」と、独り言を言いながら、かしらはニコニコ顔だ。狩りに行った男たちが帰ってくると、

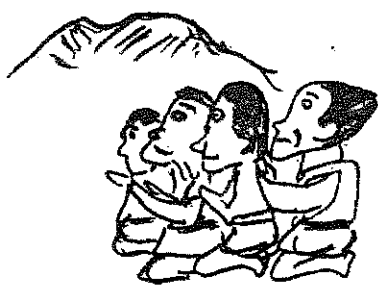
「かしら、こんな大きなイノシシがとれました。ほかに、ウサギやシカもとれました」

かしらは、狩りがうまくいったのを聞いて

「今年は、米がよくとれただけでなく、狩りもよくいっているようだ。山の神様や稲霊（いなだま）様が、わしらの働きを知って恵んでくださったのだ。神様にじゅうぶんお礼を申さねばなあ」

「稲のとり入れが終わったら、山の神様や稲霊様に、たっぷりごちそうをあげねばなるまい」青くすんだ秋晴れの空の下で、楽しい会話がかわされ

ています。数個の家のまわりには、はば二メートルぐらいのほりがある。家の前では、ねん土をこねて土器を作っている男たちもいます。



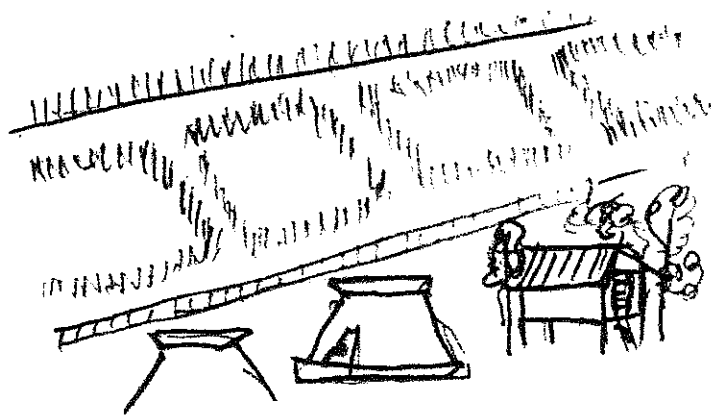
「早くせにあ、祭りに間にあわないぜ」
「いそごうせ、今年は何もかもよくとれたので、土器が足りないっていうし、神様へのお礼としてよい土器を作れということだからな」

また、鉄のおので切った木を割り、鉄の小刀でお祭のときに供えるくわやすきを作っている男もいます。待ちに待ったお祭の日がきました。

かしらは、山の神様と稲霊様にお礼を申しあげたあと、神様にあげた酒をみんなのさらについていった。

「さあ、お酒をいただきこ。お祝いだ。たんと飲んで、お礼のおどりでもしよう」

シカやイノシシの肉を酒のさかなにして、おとなたちは酒を飲み、みんなて歌いおどった。子どもたちは、カキやクリを食べながら、おとなのおりを見えています。



前の話から百年あまりもたったころの話で、今から千七百年あまりも前のことです。

田には水がひかれ、種まきも終わった。やがて稲もひびてくるでしょう。この田を見つめて一人の青年は、今年から村おさになつたナカオです。

「先祖様たちのおかげで、米作りができるようになって、生活も楽になった。米もだいぶん残るようになったし、今年、田んぼも広げている。しかし、おやじ様が死んだあとは、おれが村の者のめんどうをみなくっちゃ……」

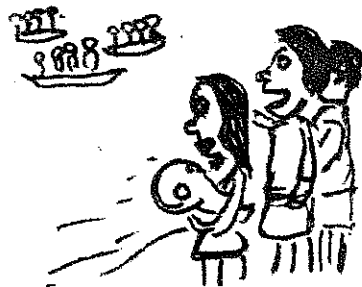
と、これからのことを考えていると、

「村おさ様、下の村の村おさ様がきましたぜ」と、よびにきた。ナカオは急いで家に帰った。



ナカオの家は、村人の家に比べると少し立派で、高床の家でした。下の村の村おさは、

ナカオのすわるのが待ちどおしいように、あいさつをするとすぐに「お願いにきましただ。今年の水が少なくて田に水がひけねえ。このままだと、米作りができねえだ。水を分けてもらえねえと、村人が生活できねえ。水をくだされば、



「同じなかまになるならば貸そう。その代わり、米をもらいたい。また、この村の田起こしなどの仕事も手伝ってもらいたい」
こんなやくそくが、近くの村おさたちとなされた。そして、ナカオは、他の村おさと区別するため、ナカオのキミとよばれるようになって、他の村おさよりも一ツ上の地位になりました。このような仲間たちの集まりがクニとよばれるようになりました。

田作りも、村人が一軒一軒できるようにになりました。そうになると、村人の中には、米作りのうまい者とへたな者がでてきて、米をたくさん持っている者と、米が足りなくなつて借りる者がでてきました。米を借りた者は、貸してくれた者の家の仕事などを手伝うようになり、身分の上下がでてきました。

今年できた米の十分の一をさしあげます。村人たちのためです。お願ひできねえでしょうか」
「下の村のことだ。水をわけてあげよう。でも、早くしないと米作りが間に合わないでしょう。明日、村人を連れてきなさい。こっちも村人を集めましょう」
次の日、下の村の村人とナカオの村の村人がいっしょになってほりをほった。それから、二つの村はいろいろなことをいっしょにやるようになり、ナカオが二つの村の村おさのようになった。

秋のとり入れが終わると、下の村から米を丸木舟に積んで運んできました。ナカオは、その米を積んで鬼怒川を下り、父から聞いていた鉄を持っていく村に行き、鉄と取りかえ、村おさと話し合つて道具作りのできる男も連れてきました。

村人たちも、鉄の道具作りを習いました。みんなが道具作りができるようになったので、すきやくわをたくさん作つた。

鉄のくわを使うので、田を作るのも水路を作るのも楽になりました。そして、米を作つては鉄ととりかえ、鉄の道具をどんどん作りました。

鉄の道具がたくさんナカオの村にあることを聞いた近くの村おさがやってきました。
「鉄のくわを、借してもらいたいのですが」

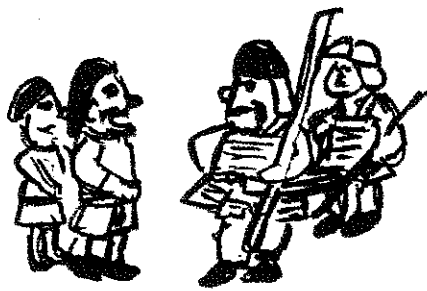
「わたしたちは、大和（やまと）の国からきた者である。わが国と同盟するならば、鉄の道具を分けてやろう。もしも、同盟しないというならば、攻め殺すぞ」と言った。ナカオは、村の主だった者を集めて「むこうの人数は少ない。しかし、鉄のよろい、鉄の剣で武装している。わしらの力では勝てないだろう」
「勝てそうもない戦いをして、せっかく作つた田をこわされたり、若者を殺すことはできない。大和国と同盟したほうがよいのではないか」

主だった者の意見はだいたい同じだった。ナカオは、みんなを従えて、大和国の使いに

「わたしたちは、大和国と同盟することにいたします。」
鉄をくださいますなら、米をさしあげます」

「そうか、それはよかった。おまえを君子部（きみこべ）のかしらにする。まちがいなく米を送ってくれば、鉄をそのときにやろう」

このようにして、大和国は次と地方のキミとよばれる者を従えていきました。ときには、大和国の仕事を手伝うために、行く者もありました。



五 大きな墓

ここは、五行川の西の台地、今の八木岡に住む人々で今から千五百年あまりも前のことです。

八木岡の村おさのヤタチは、台地の西側の低地のアシのしけた土地をきりひらいて田を作ろうとしました。村人たちと田を作ろうとすると、ヘビの体をして頭に角のある夜刀神（やとがみ・谷神・やつ神）が「この土地は、われわれ神のものであるぞ」と言った。村人たちは、夜刀神の姿を見ると、自分を始め家族全部が死んでしまおうと信じていたので、田を開くのをやめて逃げてしまった。ヤタチは、村人のためと思いい、標（しめ・土地の所有を示す標識）を山の入口に立てて、堀をほり

「ここから上を神様の土地として、ここから下をわれわれ人間の土地にして下さい。今後は、わたしが神を祭る者となって、永久にお祭りしますから、たまたたりうらまないて下さい」と、言って村人に社（やしろ）を造らせて、そして田を広げていきました。



このようにして、次々と田をひらいていったので、村のくらしは楽になっていきました。それから数年後

「おっとうたちが帰ったぞー」と言う、子どもの声に村人たちは、いっせいにうちを飛び出してきました。かれらは、オオササギのミコトの命令で墓作りに出かけた人たちです。村人たちは、みんなが元気で帰ってきたのを喜びました。その夜は、ヤタチの家の庭で、長い間の苦勞をねぎらう酒もりです。

「だいぶ長いこと行っていたが、どんな墓や」「みんなばらばらで、大和の役人の命令どおり働いただけだ。おれは、毎日毎日鉄のくわで土をほるだけだった。木とはちがって、かたい土もらくらくほれた。墓のまわりにはほりが三つもできたぜ」

「おれは、もっこで土運びだった。平らなところが、山のようになった。終わりのころになって上から見ると、前の方が広がっていて、後ろの方は円い形よ。おれらは、土ばかりでなく、河から石も運んだよ」

「おれは、こちで土器作りをじたことがある、と言ったので、土師（はじ）部の手伝いさ。始めのころは土こねだったが、いろいろな動物や人形作り、家や舟も作ったよ。だんだんうまくなってほめられたぜ」と、墓作りの様子を、次から次へと酒を飲みながら話し、長かった墓作りの苦勞を話しました。

しばらくたったある日、この村に若い夫婦がやってきました。それは墓づくりの時に村人と知り合いになったアサマロとその妻のアサメでした。アサマロが国（村）に帰ると、父母や兄弟が死んでいて、米を作っていた田があれていました。うちの中に、少しの米とアサの種がありました。近くのうちのアサメの家も、

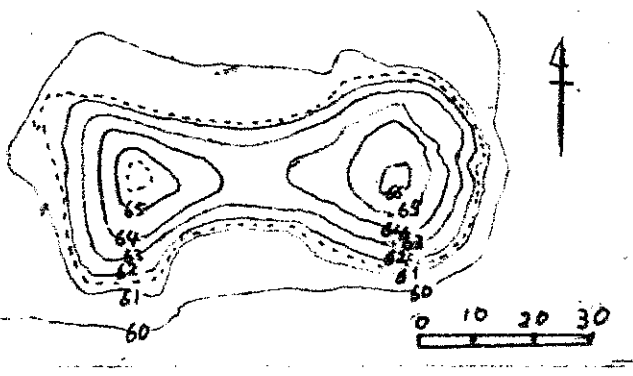


去年は米のできが悪く、家族全部で食べるには足りません。アサマロが東国の米の多い村に行くというので、二人は結婚してやってきたのです。

春になりました。着いた次の日から始めた自分の田起こしも、アサメのためのハタ織り機もできあがりしました。ほかのうちの田の仕事を手伝って、もらったもみを田にまいたり、アサの種もまきました。それから、米のできまで、村人の仕事を手伝ってくらししました。

アサが大きくくなりました。根こそぎぬいて、根を鉄の小刀で切りおとしました。それを水につけてから、一本一本皮をむき、それを糸にしました。アサメは、それをハタを使って布にしました。最初にできた布を村おさのヤタチに、お礼だといってあげました。ヤタチは、その布がしょうぶでよくできていたのでおどろきました。

ヤタチは村人たちにその布を見せて、アサメに布の織り方を習ったかどうか、また、アサマロにハタの作り方を習ったかどうか、と話しました。村人もカラムシやコウソの皮の布よりもよいので、アサの種をまき布にすることに賛成しました。アサマロとアサメは、村人たちの親切にこたえるために、一生けん命教えました。ヤタチが老人になりました。村人たちが集まって「ヤタチ様のお墓をつろう。できれば、大和国と同じ墓をつくらう」ということになり、冬のひまなとときに、前に墓づくりに行ったことのある者に教わりながらつくりました。また、墓に入れる土器（はにわ）づくりもしました。村人の姿や（母が子どもをおぶっている）家の形、土器作りをしているそばにきたニワトリも作りました。それから、舟も作りました。



八木岡のひょうたん塚

六 部民(べのたみ)から公民へ

ここは、鬼怒川の東岸の台地、今の間木堀で、今から千三百年あまりも前の六百四十年代のことです。

そのころの大和政府は、地方の豪族を国造(くにのみやつこ)と県主(あがたぬし)にして、間接的に日本国内の土地と人民を支配していました。

六百五十四年に、政治を動かしていたソガ氏が中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)と中臣鎌足(なかとみのかまたり)を中心とする人々によってたおされ、国の政治があらためられました。

翌年、都から関東の国々や地方に多くの役人が任命されてきました。その一人が中臣連(むらじ)です。連は、中のキミと会い

「こんどの政治の改革では、国造と県主が土地や人民を支配することを認めない。土地と人民は、大和の政府が直接支配することになった」と伝えた。中のキミは「そんなばかな。わたしたちは都からの命令どおりに米や布を



納めていたのに土地を取りあげるなんて」

「いやいや心配はない。あなたは国の役人として、他の人々よりも多くの田を職田(しきてん)として国からもらえることになっているし、そのうえ、今まで田を広げてきた功績にたいしても、功田が与えられることになっている。そして、その田を耕すための人々も封戸(ふうこ)という形で与えられることになっている」

「そうすると、国の役人としてもらえる田とそれを耕す者がわたしのものになるのはわかりました。しかし、今までわたしが治めていた土地全部がもらえるわけではないてしょう。残りの土地や人間はどうなるのですか」

「まず、今まで自分の家に住み、自分の田を耕していた者は公民とよばれ、男には二反(二アール)その家族の女にはその三分の二の田を与えられることになり、ほかの人の田畑を耕していた者は、耕していた田の持ち主の召し使いとして、男はぬ、女はひ、とよばれ、ぬ・ひは、公民の三分の一を与えられることになりました」

「すると、わたしは、どれくらい物が入ることになるのですか」

「あなたの封戸は二十戸ですから、何人になるかわかりませんが、あなたのぬひの数も聞きませんとわかりませんが、公民の者は、米の生産量の六パーセントと、一年に十日間の労働と、特産物を納めることになっているの

で、それだけほもらえるはずですよ」

こんな新しい政治に関する話が続きました。

中臣連の話から、一年に十日間は都まで行って労働しなければならぬこと、特産物を都まで持って行かなければならぬこと、そして、往復の食料は自分持ちであることがわかりました。都までの往復がとても大変だということ、墓づくりに行ったことのあるおじいさんたちから聞いて知っていました。そこで、村人たちは、連が職田をもらえる身分の人であることがわかると、間木堀に住んでもらい、自分たちの田が連の職田になるようにたのみました。連は、中のキミや村人たちのたのみを聞いて間木堀に住むことにしました。村人たちは喜んで、連のために大きな家を今の八幡宮の北東に建てました。

連は、米の生産量を増やすためには、水を確保することが大切であることを知っていたので、池の土手を高くしようとしました。すると、夜刀神が

「この土地は長い間、われわれ神のものであり、神として村人から祭られているのに、なぜ人が入りこむのか」と連に言うと、連は大きな声で

「この池の土手を高くするのは、人間の生活をよくするためのだ。大王(おおきみ)の教化に従わないのは、いや、たいどんな神なのか」
そして、村人たちに

「おまえたちは、大王の公民だ。そしてわたしの家の者と同じだ。大王の力は土地の神よりも強い。目に見えるいっさいの物は、大王様のものである。なにもおそれることはない。じゃまするものはどんどん打ち殺せ」と命令した。この言葉を聞いた夜刀神は、遠ざかりどこかにかくれてしまった。村人たちは、連の偉大さにおどろき、この人の言うことならば安心だと、一生けん命に働き土手を完成させました。

連はさらに、鬼怒川と田を区別するための土手造り、新たに田を作り、そして、今の加倉の低地、粕田、北中里、南中里、若旅、二宮町の田をきちんと整理して、米作りがしやすいようにした。(条理制)

連が死ぬと、大きな墓を家の西側につくった。そして墓をおがむための社を墓の南に建てた。

鬼怒川の水を治めることのできた連は、鬼怒川の水を利用する人々にとって神であった。

中村八幡宮は白ほう四年(六七六)に建てられたと伝えられています。



七 防人(さきもり)に行つた人

ここは、難波(なにわ)の津(つ)。今の大坂港)、今から千二百年あまりも前の天平勝宝七年(七五五)二月のことです。

日が西にすみそうになって、あたりはうす暗くなってきました。今、下野国(栃木県)と常陸国(茨城県)からきた防人の人々が、二・三十人ずつの輪になってすわっています。その男たちの前には、さかずきや魚のはいったさらがおいてあります。腰に剣をつけた役人が「さあ、みなの方。あすはいよいよ筑紫国(つくしの国。福岡県)に向かつて海へ乗り出すぞ。今夜は、その出発のお祝いだ。今夜のために、おかみ(政府)からお酒と魚を下されている。遠慮なく酒を飲み、魚を食べるがよい。おまえたちの務はご苦労である。しかし、大君(おおきみ)の命令で防人になったのである。このことを忘れないように」と言った。酒もりが始まりました。酒や魚がたくさんあったわけではありませんが、村を出て



から十数日の間、自分の持ってきた干飯(ほしい)と干し魚などを少しずつ食べ、飲みものといえは水だけだったこの男たちにとっては、たいへんなごちそうでした。酒を飲んでいけるうちに、自分が持ってきた干飯の残りを気にしながらの旅が終わったので、ほっとした気持ち、これから三年間のことを考えて、不安な気持ち、村に残してきた父母や妻子、そして友人への思い――などが一緒にあって、なんとも言えない気持ちでした。そんな気持ちのままに、役人が言いました。

「おまえたち東人(あずまびと)は、歌の心得のある者が多いと聞いている。今の気持ちを歌にするがよい。兵部少輔(ひょうぶしょうぶ)の大伴家持(おおとものやかもち)様は、すぐれた歌よみて、多くの人々の歌をお集めになっている。前に出発した者たちも、自分の歌をつくっている。おまえたちも、よい歌をよむがよい」役人が言い終わると、酒を飲んでいた防人たちは、前の人たちよりもよい歌をつくらうと、いろいろな姿勢で考えこみました。このころの関東地方の人々は、お祭りなどで楽しくなると、その気持ちをすぐに歌にするのがあたりまえになっていました。

「今日よりは かえりみなくて 大君の しこのみたてと いてたつわれはー今日からは、自分の事を考えずに、天皇の強いたてとなって、わたしは出て行くー」と歌いました。すると、同じ郷長の子で火長である物部真島(ものべのましま)が立ちあがって



「松のけの なみたるみれば 家人の われを見送ると 立たりしもごろー松のなみ木のところでふりかえって見ると、家族の者たちがわたしを見送るために、家の前に立ってこっちを見ているー」と歌いました。すると、これも火長の大田部荒耳(おおたべのあらみみ)が立ちあがって

「あめつちの 神をいのりて ざつやぬき 筑紫の島を さして行くわれはー天地の神様にいのり、矢をとも(矢をさす物)にさして、わたしは筑紫島をめざして行くー」と歌いました。すると、津守宿弥(つもり)のすくね(小黒す(おぐるす))が、少し顔を赤らめながら「母とじも 玉にもがもや いただきて みずらの中に あえまかまくもー母が玉であればよかった。そうすれば



頭にのせて、かみの毛の中に巻きこんで、一緒にこられたものをー」
続いて、中臣部の足国(たりくに)が「つくひやは 過ぎはゆけども あもししが 玉のすがたは わすれせなうもー月日はほとんど過ぎていくけれども、母や父の玉のような姿が忘れられないー」
すると、大伴部の広成(ひろなり)が、やっれた顔で「ふたほがみ あしけ人なり あたやまい わがするときに 防人にさすー本当に悪い人だ。わたしが急病にかかっているときに、防人にさせるなんてー」
と、自分を防人にえらんだ郷長をうらむように歌った。若旅から防人として行った君子部(きみこべ)のヒルマ口は、いろいろな人たちの歌を聞いて心が迷いました。ヨソウや荒耳のように、これからの気持ちを歌った方がよいのか、真島・小黒す・足国のように、出発や父母のことを歌った方がよいかと迷いましたが、出発の時に決めて

「防人に 立ちし朝けの かなとてに 手放れおしみ なき児らはもー防人となって出発する朝に、離れるのをおしんで子どもたちがなっていたー」と歌った。

八 吉弥侯部（きみこべ）道足の娘

ここは、鬼怒川の東岸にある台地の南のはし近くの今の若旅で、その里長である吉弥侯部道足の家で、弘仁十四年（八三三）三月十九日のことである。

家の中には、下野国の国司（今の県知事）藤原常嗣（ふじわらつねつぐ）の使い者が上座に、そしてこの家の主の道足が下座にすわっている。道足の顔には、どんな内容の使者なのかわからず不安げである。使者は「あなたの娘さんは、とても美人だぞうですわね」と、話し出した。道足は娘のことなので、いっそう不安になってきて

「どんなことでございませうか。娘は芳賀郡の役所に勤めた下野公（しもつけのきみ）豊継（とよつぐ）様のみそめられ、娘も豊継様を心からおしたいしていたようで、毎晩おいてになりました」

◎注 このころは、男の人が女の人の家に通う妻とい婚で、結婚しても一軒の家に住まず、夫が妻の家に通い、妻は生家で生活をしているのが普通でした。



そして、さらに道足は「豊継様は、郡の少領（しょうりょう）郡役所で三番目の役（て）でございまして、郡の仕事がお忙しいのに、娘のところにおいてになりました。娘も豊継様のご苦労を知って、心から接していたようでございます。ところが、おつかれのためかご病気になられました。娘は夜もろくろく寝ないで看病しましたが、ご寿命なのでしょうか、娘の看病のいかにもなく、あの世に旅たれました」

道足は、娘の話をしていくうちに、そのときの娘のなげき悲しんだ様子を思い出して、自然に涙が出てきました。使者は、道足の様子を見たが、続けて「その後、娘さんはどうしていただけますか」と聞いた。道足は涙声になりながら「娘は、豊継様の野辺のおくりをすませますと、そのお墓のそばから離れずにおりましたので、わたしが仮家を建てさせました。娘は、朝晩の食事はもちろん、花を供え、国分寺のお坊さんが唱えてくれた金光明経（こんこうみょうきょう）を唱えております」と、答えました。使者は安心したように「じつは、芳賀の役所から、あなたの娘さんは夫が死んだあと、仏の教えを守って再婚せずに、夫の供養を続けているのは婦人として立派である。このような婦人を人人に知らせてはと連絡があったのです」

と、言った。道足は不幸な子に無理な結婚話でないことがわかり安心した。そこで

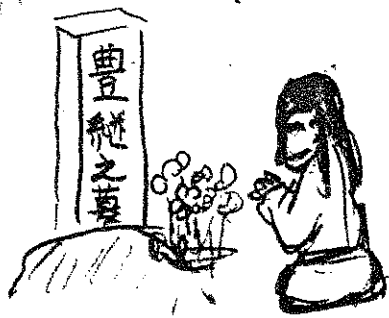
「国司様のお使いのご用は、なんてしょうか」と聞いた。使者は

「国司様も、仏の教えを守っている者を、国のおかみが認めれば、仏の教えが自然に広まるだろうと思われて、国のおかみに連絡したところ、国のおかみもそれはよいことだ、とお認めになり、女として国で最初の位をくださる事になったのです」

「すると、娘はどうようになるのでございませうか」

里長として、いろいろなことを知っている道足も、初めてのことなのでわからず聞くと、使者は言葉を改めて

「国のおかみからの命令を伝えます。道足の娘は、夫の死後、夫の供養をおこたることなく婦人として模範であるので、少初位上（しょうじょうじょう）官位として下から二番め（ふたばめ）の位を授けるとともに、位田を与え、一生の間田の租などを免除する。そして、この内容を木の板に書いて、村の出入口に立てるように。とのことです。わたしも調べてから伝えるように言われていました



ので、失礼いたしました」と、使者は最後にわびた。

道足は、国司の使いの内容が名誉なことだったので、ほっとするとともに不幸な娘が少しでも国に認められたことがうれしくて、使者を休ませ、できるだけのごちそうを作るように家人に命じた。

そして、できあがると

「急なことですので、なにもございせんが、お帰りがおそくなりましようから、それまではらのたしにしてくだされば、幸いにございます」と、赤がゆ（あざぎ）を入れた今のご飯（いまごひ）と塩さけ、きのこ、わらび、ぜんまいを出した。

使者も、ふだんよりは長く馬に乗ったので、いつもよりはらがすいていたので「遠慮なしに、ごちそうになりましよう」と、出されたものを食べた。

◎注 このころの墓は、火葬にした骨の上に土を盛り、そこに墓標を立てた。

◎注 このころの食事は、一日二食でコワメシ（むしたご飯）が正式で、間食にたご飯などを食べた。



ここは、鬼怒川の東岸ぞいの平地で、十一世紀になつたばかりのころである。

馬に乗って腰に太刀(たち)をさげ、武装した男たちを従えた男を見ると、みるからにたくましい腕、光った目、そして黒いあごひげ、それは、下毛野公時(しもけのきみとき)とよばれている男であります。公時は、後ろをふりむいて

「どうだ、田植えの用意はととのつたか？」

と聞くと、後ろにいた男が

「ははっ、すべてぬかりはございませぬ」

と、答えた。

「そうか。明日の田植えのとき

の田桑(てんがく)は、お

もいっせりはてにさせよ。若

いおなごどももの衣しようや白

いかさまだいじょうぶだな。

明日は、五・六十人も集まる

のだからな。鼓(つづみ)を

打つ男どもや笛をふく男ども

は、今日は、ゆっくり休ませ



て、明日にそなえさせよ」

「はい、わかりました。平将門(たいらのまさかど)様の時に、都からきていた人々がにけだし、あとに残った先々代様が、困っていたわたくしどもの祖父たちに、米をめぐんでくださいました。そして、先々代様の田をお借りして耕すようになり、わたしの代になりました。鬼怒川の氷が田畑をめちゃくちゃにし、田は石ころだらけになってしまいました。その時、わたしはどうにでもなれと思ったのですが、先代様が、みんな先祖様の土地を守ろう、とおっしゃられ、われわれもその気になって働きました。公時様も先代様とともに先頭にたつて、大きな石をどかし、小さな石はひろわせ、山の草や牛や馬のきゅう肥を入れて、やっとうい田になりました。十数年間の苦勞がむくわれたような気がします」

「うん、長い間のみんなの苦勞がやっとういられただうだな。だんだん、たくわえもふえてきたようだしな」と、田作りの苦勞を思い出して話をしていた。

この公時こそ、荒れた土地を開墾して自分の土地だと主張し、それが認められるようになった「タト(田刀・田緒)」とよばれる名主(みょうしゅ)である。

そこへ、一人の男がかけてきて手紙を手わたした。この手紙は、下野国の権守(ごんのかみ)藤原公則(ふじわらきみのり)からのものであった。

藤原公則は、左大臣藤原

道長の家司(けいし)・召し

使い(で、道長の推せんで

下野国の権守に最近任命さ

れたばかりの者である。国

の役人に道長個人の召し使

いを任命するという、公私

を混同した政府のしくみに

なっていたのが、このころ

なのです。

その公則からの手紙の内容は

「お前は、荒れた土地を切り開いて田を広げているそう

であるが、おかみ(政府)としては喜ばしいことである。

しかし、おかみの土地を使用しているからには、おかみに

租(今の税金)を納めるのが当り前である。わたしは、

赴任して日があまりたっていないので、国府(今の県庁)

の様子をよくわからないが、国府の収入をぶやすために、

十年以前に田を作り、租の納めていない田に租を出させ

る相談をしている。わたしは、道長様の家司である。も

しもお前が、道長様の召し使いになって、お前の持って

いる土地を道長様に差しあげる形にすれば、おかみに納

める租の半分を道長様に納めればよいようにしてやろう。

もちろん、土地の管理は今まで通りお前にいっさいまか



せるし、もしお前が都に出て役人になりたければ、役人

になれるようにしてやろう」

というものであった。この手紙を読んだ公時は、明日の

田植えをはてにやるのも、自分の力をまわりの名主に見

せつけるためであることを思って、自分の召し使いの者

を国の権守にすることができる道長の家人(けにん・家

司の下)になれば、まわりの名主たちも自分の力を認め

るだろうと考えて、家人になることを承知した。

公則が都に帰る時に、公時は公則に従って都にのぼる

ことにした。そして、公則を通して土地の絵地図を道長

に差し出した。公時は都に出て、道長の推せんで右近衛

の番長(ばんちょう)・上から三番目の職)になった。

寛弘六年(一〇〇九)八月十七日に、親王様の馬の口

取り役を無難に勤めた。また、長和二年(一〇一三)九

月十六日に、道長の家に天皇が行幸になった。道長は家

人の者をよび集めて競馬をさせて天皇に見せた。この競

馬の四番目に出場して、みごとに勝利をおさめた。

寛仁元年(一〇一七)には命令を受けて、九州まで行

ってすもうをする力持ちをさがしたが、さがし終わらな

いうちに病気にかかり、八月二十四日に死亡した。都の

近衛府の人々は、第一人者が死んだとたいへん悲しんだ。

公時のあとを継いだ公武は、父のものがあけた同三年七

月、父の役目のすもうをとる人三人を都に連れてきた。

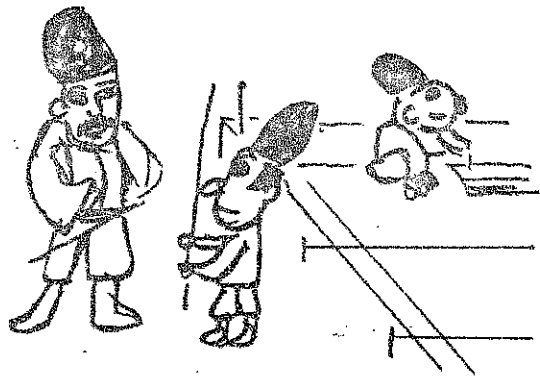
十 中村朝宗と子どもたち

ここは、中の三ツ谷の台地、今の遍照寺のある所で、保元元年（一一五六）の初冬のことである。

台地は生えている木を切りたおしている者。たおされた木を柱や板にしている者。切りたおした木の根をほりおこしている者。てこはこの土地を平らにしている者。数十人の者が初冬の寒さにもかかわらず、額に汗を流して働いている。これは、のちに中村朝宗とよばれる、藤原朝宗の屋敷を造っている様子なのです。

数十人もの人を使って家を造らせる朝宗とは、どんな人物なのでしょう。

今年の七月十一日に京都の人々をおどろかせた大きな事件（保元の乱）がありました。この事件は、鳥羽法皇の第一皇子の崇徳上皇と、第四皇子の後白河天皇の間に、天皇の位をめぐる争いがあり、それに藤原氏の関白忠通と左大臣頼長兄



弟の勢力争いが結びついて、それぞれが武士を味方にひき入れて戦いになったのです。

朝宗の父光隆（みつたか）は、待賢門院（たいけんもんいん・崇徳上皇と後白河天皇の母の藤原しょう子の院名）に仕えて京都にいたため、親類の源為義（みなもとのためよし）が味方した崇徳上皇側について、崇徳上皇の御所（ごしょ・屋敷）の白河殿を守った。

この戦いは、源平（げんぺい）両氏の武士が、それぞれ二つに分かれての戦いのため、なかなか勝負がつかなかった。しかし、天皇方の武士が、白河殿の風上に火をつけたため、上皇の御所に火が移り、守っていた多くの武士が戦死した。その中の一人が光隆なのです。

朝宗は、伊勢国の荘園で父の死を聞き、京都に向かうとするのを、妻の美濃局（みののつほね・源為義の娘）の郎従（家来）の菅、原田らが

「今度の戦いは、身内同志の争いです。上皇方の一族の者をさがすでしょう。しかし、お互いが親類ですから、都から離れた土地に移って名を変えれば、見のがしてくれるでしょう。どうでしょうか、われわれの中村荘に下って、お屋方様になっていただけではないでしょうか」と、言った。それを聞いた美濃局も

「兄の義朝（よしとも）が天皇方にいます。一時姿をかゝして、おちつくまで都を離れましょう」

とすすめた。また、ほかの郎従も中村荘への下向をたのんだので、朝宗が荘官となるためにきたのである。

屋敷が完成しました。屋敷の中央には朝宗夫妻の住む木造の建て物があり、その南には家人や召し使いの住む長屋があった。そのほかには、馬小屋も建てた。これらの建て物を囲むように土のへいや板のへいが造られ、その外には八メートル、深さ九メートルの堀をほった。

落成祝いの日がきました。中村荘の主だった人々が参加しました。菅が一同を代表して祝いの言葉を述べると「みなの方、ご苦労であった。よい屋敷ができて、うれしく思うぞ」と、朝宗が心から礼を言った。すると、菅は

「朝宗様、中村十二郷の主ですから、荘園名をとって中村を通称としてくだされば幸いです」

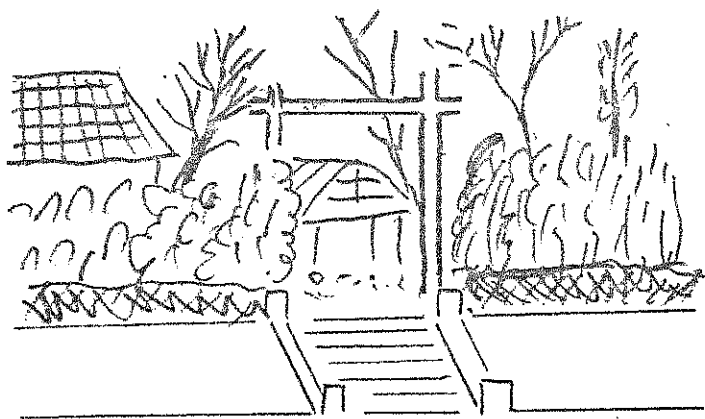
「わかった。そう名乗ることにしよう」と、朝宗が答えた。一同の者は喜びの声をあげた。そして、祝宴が始まり、話をしながら夜がふけるまで続いた。

それから十年間、朝宗は中村荘の荘官として、荘民とともに田畑の手入れに力を入れ、米や布をだくわえる倉も増えた。そんなある日、二条天皇の使者がやってきて、高松院（二条天皇の中宮の妹子・しゅし・内親王の院名）に仕えるように命令された。やっと都に上ることができるようになったのである。朝宗は、京都と中村荘を往復

することにになった。そして、京都で荘殿坊行勇と知り合いい、東福院別当坊妙法寺の再興をたのんだ。行勇は心よくひきうけてくれた。そこで、朝宗が本願となり、行勇を再興の第一祖師として寺院を建立した。このため、「大御堂東福院荘殿寺」と称するようになった。

安元二年（一一七六）に高松院がなくなると、第一の故郷の中村の地にもどり、伊勢国の荘園の中、嫡子為宗に吉行名と松高名、家城庄を、三男資綱に三ヶ山を管理させた。

平氏が寿永四年（一一八五）三月二十四日に滅亡すると、為宗は後鳥羽天皇の准母皇后の亮子（りょうし）内親王（二条天皇の妹）に仕えて、皇后宮権少進の職につくことになり京都に上り、公家と交わった。



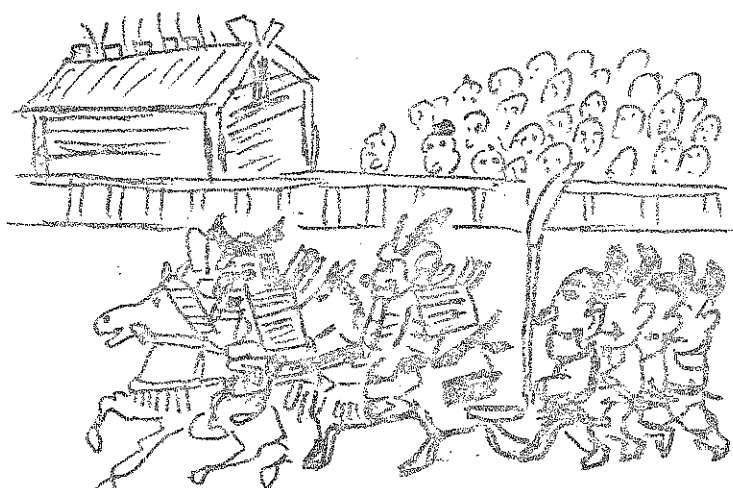
ここは、中村八幡宮の境内、文治五年（一一八九）七月下旬のことである。

境内には武装した男たちと、それを見送る家族たちがごったがえしている。この人々は、去る六月二十七日に源頼朝が奥州の藤原氏を討つという御教書（命令）に応じた人々なのです。

この命令は、朝宗の子の為宗が受けて朝宗に伝え、朝宗から郎従一同に伝えられて、集まってきたのです。

朝宗が、為宗と四男の為家とともに入ってくると、伊波野、菅、堀城、原田、ただ木らを筆頭に勢ぞろいをした。

時刻になると、神主野口某とその



と言つと、郎従一同が声をそろえて

「軍扇をお頭様と思い、命の限りを尽します」と答えた。

為家を先陣の将とし、為宗を大将とする陣形となり、一族郎従がそれぞれの部署につき、宇都宮に向かった。

同二十五日、宇都宮で鎌倉からきた頼朝を迎え、鎌倉からきた為重、資綱と合流し、頼朝の先陣となって陸奥国の伊達（だて）郡めざして出発した。

八月八日、為宗ら四兄弟は、阿津賀志（あつかし）山の石那（いしな）坂を守る藤原泰衡（やすひら）の部将佐藤庄司、河辺太郎高綱らの軍と対陣した。

為宗は、弟たちと重臣を呼び集め

「この坂では、下から攻めても勝利はむずかしい。敵陣近くまでひそかに進み、一気に攻めこもう。よろいやかぶとをはずし、まぐさの中に入れよ」と、自分からよろいをはずした。弟や郎従たちもこれにならった。準備ができると、声も出さず、音もたてずに沢原の辺りまで進んだ。無言で進撃を止めると、為宗はよろいかぶとを身につけた。弟や郎従たちも、音をたてないよう、よろいかぶとを身につけた。

「一同の者、攻めかかれ」

為宗の声に、弓に矢をつがえて敵陣に射ると同時に「おう、おう」

他の神官、神楽男（かぐらおとこ）八名と乙女（おとめ）によって御神楽が演じられた。御神楽による戦勝祈願が終わると、為宗は神殿に三拝九拝してからおごそかに

「かけまくもかしこき八幡の大神の宇都の広前に、謹みて申す。我、このたび、鎌倉殿の仰せによって、奥州の藤原氏を討つことに同意したのは、君のため国のため、武門の面もく、子孫の光栄のためで、こんな名譽なことはない。ただ微力のため大軍を連れて行くことができな。わずかに一族郎従を連れて大敵を征伐しようと思ひます。お願いできますならば、往路万里の末まで（遠い所）も、慈愛の目をもって、夜の守り日の護りに守ってくださいますように。例え、わたし自身は戦場でどうなっても、一族郎従らが奮戦激戦して、敵を平定する大功がありますように。そうなれば、帰国後は子々孫々まで永久に当社の壇徒となり、大神の御威光を施します」と祈誓して、八幡宮の前に旗を立て、頼朝の御教書を一同の前で読みあげ、神主から戦勝祈願の御神酒をもらい、一同の者で飲んだ。そして、為宗は「今度の出陣には、父は参加しないが、この軍扇は父が大切にしている物である。父と思ってくれするように」と言った。朝宗もつけ加えるように「わしが老体のため、鎌倉を守るようにという命令を受けたので、参加できないが、軍扇をわしと思ってくれ」

と、ときの声をあげ、刀をふりかざして石那坂の敵陣に切りこんだ。佐藤庄司らは急に功め込まれてあわてたが、陣地を守ろうと必死の勢いで防戦した。戦いが長びくと

多勢に無勢、為重、資綱、為家らのしし奮迅の働きもおよばず、次々に負傷した。これを見た為宗は、軍扇をふりかざして佐藤の陣に攻めこみ「それひくな、味方の軍が応援にきたぞ」と、大声で郎従をはけましながら、右に巡り左に駆けて攻めまくったので、郎従たちも力を得て

「それ、おん大将を討たすな」と、死を覚悟して敵陣に切り込んだ。この必死の勢いに佐藤の軍は右往左往した。

ついに、佐藤軍は破れ、佐藤以下の主だった者十八名が戦死した。名の知られていない郎従の数は数えられないほどであった。退却する敵軍を追い、主だった者の首を経方岡にさらした。ほかの先陣の者もそれぞれ勝って、泰衡の本陣めざして進み、ついに、九月二十日には泰衡を討ちとることができた。



十二 朝宗は伊達郡の地頭に

ここは、鎌倉にある中村氏の屋敷の中、文治五年十二月二十四日の夜のことである。

頼朝の御所から帰った朝宗父子は、朝宗の部屋に入っ
て、やっとおちついて話せるようになった。為宗は朝宗
に向かつて、兄弟を代表して

「父上、留守の大役、ご苦労様でした」
と、父の労をねぎらうと、朝宗は

「なんのなんの、鎌倉は平穩無事で苦労などなく、ひま
をもてあましたわ。それにしても、お前たちこそ、遠路
の出陣ご苦労であった。一同の者が負傷程度で全員無事
に帰国できたのは、
まずまずよかった。

そのうえ、お前た
ちの働きが御所様の
お目にとまり、わし
を陸奥国の伊達・信
夫両郡の地頭職にし
てくださるとの仰せ、
さらに、当座のほう
びだとして、金銀や
布などをいただいた。



家門の誉れ、これ以上のことはない。ご苦労であった」
と、四人の子どもたちに礼を言った。そして

「郎従どもに、わしらに遠慮せず、勝利の祝杯を始める
ように伝えよ。わしらも、父子水入らずで祝杯をあげよ
うではないか」

と言うと、為家はすぐに立ちあがって、そのことを一同
の者に伝えた。朝宗の部屋にも酒が運ばれた。

郎従たちは、久しぶりのつくりだふん困気の中での
宴会なので、始めのうちには遠慮がちな声で話し合ってい
たが、酒がまわってくると、歌う者、おどる者がでてき
てにぎやかになった。その声が朝宗たちの部屋まで聞こ
えてくるようになった。朝宗は笑いながら

「ほうほう、だいぶ派手にやっている。戦場では気をゆ
るして飲めんじゃつたろう。今夜は祝いだ。すきにさせ
てやろう。二郡の地頭職もあれらの手がらだからな」
と言い、父子水入らずで静かに酒を飲んだ。

それから数日後、御所頼朝の許しを得て中村荘にもど
った朝宗父子と郎従一同は、朝宗の屋敷に入らずに中村
八幡宮に参拝して、野口神主に会い

「このたびの出陣に、一族郎従の者が全員無事に帰国で
き、そのうえ、大功をたてられたのは、八幡の大神の厚
い加護のたまものです。出陣の時の誓言どおり壇徒とな
ります。田三十三丁を神領として寄進いたします」

た。その席上で朝宗は

「わしも年である。去年の
出陣の戦功によって、支配
する土地も広がった。これ
をきに隠居したい。そこで、

嫡子の為宗には以前から管
理させていた伊勢国の荘園
と中村・伊佐荘の地頭職、
二男の為重には新領地の伊
達・信夫両郡の地頭職、三
男の資綱には以前から管理

させていた伊勢国の荘園と伊佐荘の一部、四男の為家に
は伊達郡の一部を与えることにする。嫡子為宗を総領と
して力を合わせて家名をあげてもらいたい」

と、家督を子どもたちに譲ることを、郎従に話し
「この中村荘は、文治三年の調べて前の摂政藤原基通様
の荘園であることがわかった。これからは、伊佐を通称
とした方がよいであろう。わしの場合にはそうはゆかぬが、
為宗と資綱はそうするがよい」

と話した。為宗も資綱もそうすることにした。

雪のとけるのを待たずに、為重と為家は、伊波野、堀
城、菅、原田、ただ木らの重臣の一族の者を連れて、伊
達郡に向かつて新しい門出をした。



と、野口神主に申し出た。神主は

「それは、ようござった。全員無事であったことは、な
によりもよいことです。おめでとうございます」

と、祝いの言葉をのべた。朝宗はさらに

「この軍扇は、この度の戦いに使いましたものです。神
恩へのお礼として、奉納させて頂きたい」

と、軍扇を神主に差し出した。そして、まだ家族とゆっ
くり会っていない郎従たちのことを思い、郎従と別れた。

そして翌日、荘厳寺の僧を招いた。

「この度のわれわれの出陣に対して、荘厳坊様をはじめ
僧一同が、大御堂において凶徒降伏と中村家の武運長
久の読経をしてくださったこと、まことにありがとうございます
ございました。仏様の加護により全員が無事に帰国できま
した。つきましては、仏恩へのお礼として、田三十丁を
寺領として寄進いたします」

と申し出た。荘厳寺の僧も

「この度のご活躍、おめでとうございます。今後とも、
壇家の繁栄をお祈りいたします」
と、言って帰った。

朝宗の寄進した神領は、建久四年(一一九三)六月二
十一日に、頼朝より神領として認められ、その証拠の木
札が頼朝から与えられた。荘厳寺も同様であった。

翌年正月、朝宗は一族郎従とともに、正月の祝いをし

1 伊佐為宗

ここは、常陸国の鹿島(かしま)神社の社務所の一室、
建久四年五月一日のことである。

部屋の中には、鎌倉からきた八田知家が上座に、神社
の造営奉行の伊佐為宗と小栗重成が下座にすわっている。
知家は、ゆったりした声で

「当鹿島神社は、二十年に一度必ず造営することになっ
ている。前の造営が承安二年(一一七二)であるから、
去年で二十年が経っている。ところが、造営されていな
いことを、御所様(頼朝)がお知りになって、社領を知
行している多気太郎に命令して、今年の七月十日の祭
礼までに造営を終わすように、とのご命令です」
と言った。為宗は、しっかりした声で

「お役目ご苦労でございます。御所様のご命令を知行し
ている者に伝え、必ず期日
までに完成させます」
と答えた。そして、直ちに
神社領を知行している者を
よび集めて、人数を増やし
て期日までに必ず完成する
ように、と伝えた。



頼朝

為宗らの努力によって、七月十日の祭礼前に造営を完
了し、祭礼をにぎやかにすることができた。

為宗は、造営の仕事が終わると、中村荘でゆっくりと
休む間もなく、鎌倉の屋敷にもどった。

そして、七月二十四日の夜、左近将監家景(いえかけ)
が訪ねてきた。来客のあいさつがすむと、家景は

「今日、横山権守時広が御所に馬を献上した。ところが
よく調べてみると悪馬であることがわかった。そこで、
馬を陸奥国まで連れていく役目がわしのところに来た。

しかし、わしの郎従には馬扱いの巧みな者がいない。為
宗殿の郎従は馬扱いが巧みな者が多いと聞いています。
借してもらおうわけにはいかないだろうか」

と言った。為宗は、武士は相身互いであるので
「よろしい、郎従一人をお借しいたしましょう」
と言って、源五七郎をその席によび

「ここにおいてのお方は、左近将監殿だ。お前の馬扱い
の腕をみこんで、陸奥国まで馬を連れて行ってほしいと、
おっしゃられるのだが、どうかな」

と言うと、源五七郎は伊達郡に行った友に会えると思
い「はい、承知いたしました」
と答えた。この時は、馬を射殺して一年間も逃げかくれ
しようとは、思いもよらないことであった。

為宗は、京都で生活していた関係で、法要などの時の

作法にくわしかったので、法要の時の僧侶(そうりよ)
に渡す布施(ふせ)取りの役をしばしば務めている。そ
の最初は、建久五年正月七日の心経会(しんきょうえ)
に將軍頼朝に代わり、続いて閏八月八日の志水冠者(頼
朝の娘むこ)追福(死者の幸福を祈る法事)には、御台
所の政子に代わり、そして、十二月二十六日の永福寺内
の薬師堂完成の供養のときに頼朝に代わってしている。

1 この後、為宗に関する記録はない

2 為重・資綱・為家

為重は、伊達郡に住んだので伊達次郎とよばれたが、
陸奥国の治安のために伊達郡にいたらしく、鎌倉での役
割は少なく、建久六年三月十二日の東大寺供養に將軍家
が出席するために出発したが、このとき資綱や為家と
もにお供した。この時は、頼朝が鎌倉幕府の力を公家
に見せるためもあって、主だった御家人を総動員した。

先陣は島山と和田の一族、後陣は梶原と千葉の一族、
重臣は七名が將軍の近くに、十一名は最後にお供し、
先陣と將軍の間に随兵百十七名、將軍と後陣の間に随兵
百二十三名の合計二百八十三名の名前がわかる。このほ
か、各々の郎従がお供しているが数は不明である。

頼朝は、鎌倉にもどって一カ月後の九月三日に、陸奥
国の地頭たちを集めた。そして
「お前たち、ご苦労であろうが、直ちに帰国して、平泉

の寺や塔の修理をするように」

と命令した。為重らは、直ちに帰国して寺や塔の建物の
修理の手助けをした。

資綱は、伊佐三郎とよばれ、建久元年の頼朝の京都市
と、同二年二月四日の頼朝の鶴岡八幡宮の参拝のとき
弟の為家(伊達四郎)とともにお供をしている。

為家は、將軍のそば近くに仕えていた。そして、建暦
二年(一一二二)六月七日の夜、將軍実朝の宿直であっ
たが、同僚の萩生右馬允の郎従と為家の郎従が刀を抜い
て切り合い、両方の郎従一人ずつが即死し、二人が負傷
した。この騒ぎが將軍の寝所近くだったので、鎌倉中の
騒ぎとなって、御家人が多数御所にかかけつけた。

翌八日、為重と右馬允は將軍の前によび出され
「お前たちには関係のない争いではあるが、郎従の不始
末は主人の責任でもある。よって、為家は佐渡国へ、右
馬允は日向国に流罪とする」

と言われ、直ちに流罪の国に行かせられた。
為家は、数年で許され、建
保七年(一一二九)正月二十
七日、実朝が右大臣就任の報
告のために鶴岡八幡宮に参拝
したが、このときにお供した。
そして実朝は公暁に殺された。



実朝

十四 御家人の結束

ここは、鎌倉にある北条氏の屋敷の中、承久三年（一二二一）五月十九日の夕方のことである。

屋敷の中には、鎌倉幕府の主だった武将が集まっている。執権北条義時の連絡を受けて集まってきた人々である。みんなが席につくのを待って義時が

「五月十五日に、わしを討せよという院宣（いんせん・上皇の命令）が出ているのを、ご存知でしょうな」と言くと、三浦義村が

「知っている。それを知らせたのが、おれだからな」と、大きな声で言った。義時がさらに

「その理由は、ご存知か」と言くと、集まった武将たちは、となりの者と話し出した。理由はよくわかっていないらしい。この時、尼御台の政子が静かに立ちあがって

「皆の者、心を一つにして聞きなさい。これがわたしの最後の言葉です。なくなつた頼朝公が朝敵を征伐して、関東に幕府を始めてから、みんなが、官位や所領をたくさんもらっているはずですよ。その恩は山よりも高く、海よりも深いはずですよ。その御恩に答えようとする気持ちも浅くないはずですよ。しかしこのたび、舞女亀菊の訴えを聞いた後鳥羽上皇様から、摂津国の長江・倉橋の両荘

と、尼御台の政子の命令に従う態度をはっきりさせた。その後、朝廷との戦い方法について、積極論と消極論の二つに分かれたが、結局積極論にまとなり、出陣を五月二十二日と決めて開散した。

五月二十二日、北条義時の子泰時を東海道の総大将として十万余騎の武士たちが出陣し、武田信光を東山道の総大将として五万余騎の武士たちが出陣し、北条朝時を北陸道の総大将として四万余騎の武士たちが出陣して、京都をめざした。伊佐為宗の子大進太郎と伊佐三郎は、東海道の軍勢に加わって進撃した。

六月六日、摩免戸（まめんこ）川を幕府軍が渡った。朝廷軍の大部分は、勢いにのまれて京都をめざして逃げ出したが、山田次郎が独り残って幕府軍にたち向かった。これを見た伊佐三郎は山田に切りかかった。二人はしばらく戦ったが、三郎の方が強く、山田は命からがら逃げた。

六月十四日、朝廷軍はこの宇治川の戦いに全てをかけて陣をしきました。東海道を進んだ十万余騎の幕府軍も川岸に陣をしきました。宇治川は、昨日の雨で増水して、

の地頭職をやめさせよ、という命令がきました。それを義時が、將軍から武功によって与えられた職を、理由もないのにやめさせることはできません、とことわったために、義時を討てという命令がでたのです。これで、鎌倉幕府は朝廷の敵となつてしまいました。朝廷では、幕府をたおす軍をすてに集めていたとのことです。頼朝公の御恩を思えば、頼朝公のお墓のあるこの鎌倉を、京都の武士どもに荒されてよいものだろうか。名を惜しむ者は、秀泰、胤義らを討ち取って三代將軍の遺跡を守りなさい。しかし、朝敵となることをきらい、朝廷の命令に従いたい者は、すぐに申し出なさい」と、一生けん命に話すと集まった人々は、頼朝の恩を思い出した。するとそのとき、武田信光が口を開いて



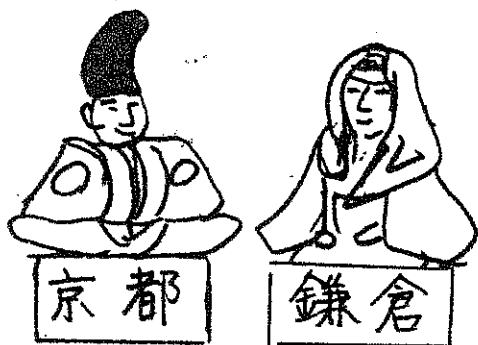
「尼御台様、われわれが頼朝公の御恩をなんて忘れましょう。わしは、尼御台様の命令に従います」と言くと、一同の者が「われわれとて、同様でございます」

「この急流を渡る者はいないか。宇治川の一番乗りは、この戦いの第一の殊勲者であるぞ」と、大声で命令した。これを聞くと、われ先にと川に馬を乗り入れたが、急流におし流されて、九十六名の武将と八百余人の郎従がおぼれ死んだ。伊佐大進太郎もその中の一武将であった。

伊佐家は、総領の大進太郎が戦死したため、子の太郎が家督を継いで右衛門尉に任官したが、幼少のため大進太郎のいとこの三郎が兵衛尉に任官して本家を補佐した。兵衛尉は、安貞二年（一二二八）七月二十三日、將軍頼朝のお供をして駿河守義村の屋敷に行つた。

成人した右衛門尉は、嘉禎三年（一二三七）三月八日に、幕府が主計頭師員を奉行とする近習組三組、各組六名の近習の一人に選ばれた。そして、仁治元年（一二四〇）八月二日には、頼朝將軍のお供をして鶴岡八幡宮に参拝した。（近習は主君のそば近く仕える役）

また、伊佐一族の四郎藏人は、嘉禎四年正月二十八日に鎌倉を出発して京都に向かう頼朝將軍のお供をして、弓ぶくろ差し一人と徒歩の者三人の計四人の郎従を連れていった。



十五 伊佐（中村）経長の活躍

ここは、伊佐本家の館（今の遍照寺）の中、建武元年（一一三三—四）のことである。

武装した郎従を連れ、武將が経長の屋敷にやってきた。経長が部屋に武將を通して上座に案内した。武將は「このたびの罪により、中村荘の地頭職を取りあげ、小栗掃部助（かもんのすけ）を中村荘の地頭職とする」という命令を経長に伝えた。このたびの罪というのは、昨年（元弘三年）五月に、伊佐家の総領の治部丞と一族の孫八、三郎らが、勤務先の京都の六波らにいた関係で、探題（たんだい・長官）の北条時益と行動をともし、朝廷方になった足利高氏（のちに尊氏）の攻撃を防いだ。しかし、七日に時益が戦死したため、北条越前守仲時に従って、光厳天皇を奉じて東に向かった。そして、九日に光厳天皇を奉じていた武將四百三十二名とともに討死した。そして今年、朝廷方の新政府が後醍醐天皇を中心として成立した。勤務していた関係とはいえ、光厳天皇方として働いたからである。

経長としては、中村荘の地頭職取り上げは、本領なのでつらいが大難が小難ですんだので、すなおに受けた。そして数日後、小栗氏の代官がきたので、館を渡して伊佐の館に移った。

み、十六日には安原で敵軍を破り、二十八日には足利尊氏の子の義あきの軍を攻めて鎌倉を占領した。翌年正月、鎌倉を出発して西に向かい、各地で敵軍を破って進んだが、二十八日に美濃国の青野原で今川範国（のりくに）の軍と戦って破れて伊勢国に入った。そして、二月二十一日に鈴鹿を通過して奈良に入り、二十八日に北党軍と戦って破れ、吉野に行つて後醍醐天皇に拝謁した。九月三日、南党方は東国で勢力を増強するために、伊勢国の安濃津から四隻の船に分乗して東に向かった。このとき、経長は北島親房に従った。十一日に遠州なだて台風にあつて四隻がばらばらになつたが、幸い経長らの船は房州の東条浦に流れ着いた。そして、河波崎の神宮城を攻め落とし、十月には小田城に移った。経長と行朝は伊佐城に入った。このため、南党に味方する者が増えた。翌年（延元四・暦応二）春日頭国（頭時）を大将とする南党は伊佐城から北上して、八木岡、益子、上三川など宇都宮氏の部將の城を攻め落とし、四月十二日に芳



翌二年、小栗の代官は、中村荘の農民に用水路をふさぐように命令した。これを聞いた経長は、伊佐から中村荘にきて、代官に「この用水路は、長沼荘のための用水路であるから、これを止めると長沼荘の人々と争いになるから、やめた方がよい」と説明したが、代官は聞かないで用水を止めた。

そして四月の末、長沼秀行の代官が、小栗の代官のところへ用水を流すようにという命令書を持ってきた。この年、陸奥国の伊達家は、本家が中村荘を取り上げられたので、氏神の八幡宮の社頭の修理をして、中村荘が本家にもどることを祈願した。（翌三年二月完成）

建武四年（延元二年・南朝年号）九月、北島頭家は義良親王を大将に伊達行朝らと宇都宮にきた。これを聞いた経長は一族の者と行朝の軍に加わった。同年十二月十三日、経長らは伊達軍の先ぼうとなつて利根川で上杉憲顕、細川和氏らの軍を破つて武蔵国に進



賀氏の居城の飛山城を攻め落とし、十月三日には北党の高師冬が常陸国にきたので、北党の勢力が強まり、翌年（一一三三—四）四月から南北両党の戦いがはげしくなつた。経長と行朝は南党に食料を運んだ。北党は、茂木知貞に東茂木保を与えるなどの方法で味方をふやしたので、南党の力が弱まり、親房は小田城から関城に、興良親王と頭時らは下妻城に移り、行朝は伊達郡に帰った。翌興元二年（暦応四）五月から北党の攻撃が強まり、六月から南党の城が落ち、十月十六日には、東条、下妻、長沼氏らが北党についた。十一月十日、小田城主治久も師冬に内応したので、興良親王と頭時は大宝城に、親房は関城に移ったが、十二月六日に師冬らが攻めてきた。興元四年（康永二）四月二日、頭時は大宝城を出て関城を包囲していた結城直朝と佐竹一族を切り、伊佐城に入り経長らとともに、北党の食料の道をおさえて北党軍を破った。しかし、十一月十一日に、関、大宝城が落城して、北党軍は伊佐城に全力を向けた。経長は城を出て泉村で戦ったが破れたので結城氏に降った。このようにして、南党の各城は、北党からの利によって、あるいは北党の力攻めによって、北党側になつていき、関東の各武將たちは、鎌倉に置かれた鎌倉府に仕えるようになっていった。（真岡の將の芳賀高名入道禪可は、尊氏と義兄弟で北党に味方した）

ここは、鎌倉にある小栗満重（みつしげ）の屋敷で、
応永二十三年（一四一六）十月のことである。

鎌倉府の執事上杉氏憲（うじのり）入道禪秀・せんし
ゅう）の使いの者と満重が話をしている。

この満重は、建武元年（一三三四）に中村荘の地頭職
に任命された重貞の四代の孫である（重貞——のり重——
一行重——基重——満重）小栗家は、重貞が建武二年に
北条時行が兵を挙げたときに味方したが、時行の軍が破
れたため、重貞は時行の武將の名越時兼の首を取って、
足利尊氏に降参したため所領は減らされなかった。

その教訓から、重貞は子の名も義のりの一字をもらっ
て、のり重と名乗らせ足利党になることを遺言した。し
かし、重貞の子孫たちは南北朝の戦乱のときには、南北
のどちらにもつかずに領地の安全をはかってきた。そし
て、元中九年（一三九二）後龜山天皇は大内義弘のあっ
せんで、南朝が正統であることを条件に京都に帰り、北
朝の後小松天皇に位を譲り、南北朝の合一がなった。こ
れを機会に小栗氏は、鎌倉府に真剣に仕えるようになって
た。そして執事の上杉家に近づいていったのです。

上杉家の使いの話は

「十月二日に、関東公方（くぼう）室町幕府が鎌倉に置

といや味まで言われた氏憲は、腹をたて腹たちまぎれに、
五月二日、執事職をやめて屋敷に病氣だと言ってひきこ
もってしまった。ところが持氏は、待っていましたとほ
かり、十八日に上杉憲基（のりもと）を執事に任命した。
「すわ、事が起こるのではないか」と、鎌倉中の人々が合戦の起るのを心配し、各武將た
ちもそれぞれ立場をきめて合戦の準備をした。

十月二日の晩、連絡を受けた武將たちは、ひそかに宝
寿院に集合した。そこには、氏憲をはじめ持氏のいとこ
の持仲（満隆の子）がいた。そして持仲を総大將として
持氏のいる浄妙寺を攻めることにした。

「夜討ちです。敵襲です」

けたたましい声に目を覚ました持氏のまくらもとには、
宿直（とのい）の木戸將監が立っている。

「禪秀入道がそむきました。お逃げ下さい。当お館（や
かた）は手うすです」

言うやいなや、將監は持氏をだきかかえ、そばにあった
被衣（かつらぎ）をかぶると、裏門から外へぬけ出した。
しばらく走ると、行く手に騎馬の一団が現われた。

「敵か」

と立ちすくんだが、幸い味方の武將である。武將は持氏
をくらの前輪にすくいあげると、憲基の屋敷めざして走
った。そこには、中村政国が主人結城基光とともに守っ

いた関東管領を応永のころか
らよぶようになった。持氏を

攻めるから参加するように」
という内容であった。満重は

祖先の遺言ではあるが

「二日の晩には、必ず宝寿院
に集まります」

と、答えざるをえなかった。

なぜ関東公方とその執事（
当時は関東管領とよぶようにな
っていった）が対立するよう
になったのでしょうか。

それは前年の四月末からで、

その直接の原因は、腰幡（こ
しはた）六郎という武士の領地問題からです。六郎が、

ざん言にあって鎌倉府に領地を没収されたとき、六郎を
あわれんだ氏憲が、政所（まんどころ）の評定の席上で
取りなしたからである。ところが、持氏はがんとして決
定を変えない。そのうえ氏憲に
「日ごろ、家人同様に屋敷に出入りしている男のなき言
なので、非を理に曲けて助けたいのだろう」
とからみ、さらに

「その方は、六郎からそでの下をいくらもらった」

ていた。しかし、氏憲の軍の速攻
に破れた。

そして十日、持仲を公方として

氏憲が管領になった。このことは
すぐに京都に伝わり、幕府は駿河

国の守護今川範政に持氏を助ける

ように命令した。範政は、この命

令を関東の武將に伝えたので、武

將は持氏に味方し、佐竹氏は氏憲

軍を破った。持氏側が勝った。

翌二十四年正月十七日に、持氏

は武將たちの功を論じて、氏憲に味方した武將たちの領
地の三分の一を没収することにした。

この処置を不満に思った桃井宣義や満重は、持氏をた
おす計画を立てたが鎌倉府にわかり、翌二十五年五月十
日に、宣義と満重は退治されて、所領を没収された。

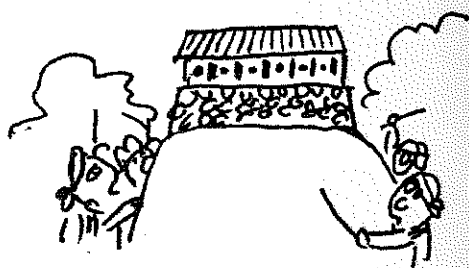
同二十九年五月、満重は岩松氏の残党とともに小栗城
で鎌倉府にそむいた。六月十三日に、持氏の命令を受け

た小山満泰の軍が攻めてきたが、八月に宇都宮持綱や桃

井らが満重に味方した。そこで、持氏は上杉定頼を大將

とする軍を送ったので、十一月に小栗城が落城した。

翌三十年、満重は三たび兵を挙げたが、持氏が結城城
にきて、常陸・下野の武將を指揮したので落城した。



ここは、結城城の城内、永享十二年（一四四〇）正月のことである。

城内の奥深くの結城氏朝の部屋には、重臣の水谷伊勢守、築田修理亮、同将監、黒田民部丞、中村政国をはじめ、結城家の主だった者たちがいる。

「春王、安王様をお迎えしたいが」

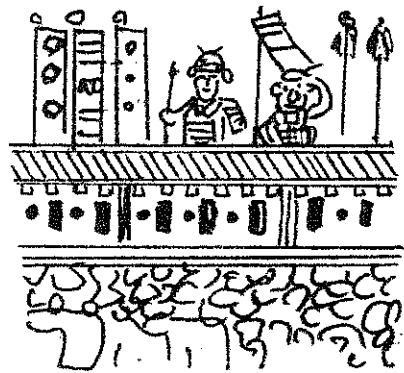
「当家は累代に及ぶ名家であり、代々正義に味方して、一日の不忠の者にも組みせず、しかしながら、去年の乱に幕府と対立した持氏様のお子様を」

と、一同の者がいろいろと思案した。

去年の乱の原因は、永享十年六月に端を発している。

関東公方の持氏は、嫡子の元服のときに、將軍の一字をもらおうという先例を破った。関東公方としてきまりを破ったのである。これから、持氏と幕府や関東管領の上杉憲実との不和が始まった。

十月十九日、管領の憲実が軍を引きつれて分倍



河原までおしよせてきたと聞いたとき

「憲実が、このおれを攻めるのか」

持氏は耳を疑った。憲実の軍は要所要所に火を放った。「公方殿、見参」

聞き覚えのある憲実の声を聞いたとき、はじめて現実だとわかった。憲実は持氏を捕えた。百年四代にわたる足利氏の恩は関東の各武将の中に深く入りこんでいて、氏朝ら十三名は持氏の助命を願う書状を幕府に出した。しかし聞き入れられず、同十一年二月十日持氏は永安寺で腹を切った。混乱にまぎれて安王、春王の二人は日光に、そして永寿王は信濃の大井持光にかくまわれた。その安王と春王を迎えようというのである。

一同の思案を破ったのは、厚木掃部介の声である。

「若君様方、お入り」

一同が声の方を見ると、安王と春王を案内しているのは氏朝の子の七郎光久であり、その服装からみると迎えに行ったことは事実だ。四人の重臣は氏朝に思いとどまらせることが無理だとわかり、髪を切って城を出る決心をした。政国は、結城氏の恩義（小栗氏の没落で中村荘が結城領となり、政国が中村荘の地頭になった）を思い「今となってはやむなし、ただ戦うのみ」と言った。この発言に一同の者も同意した。伊勢守も

「乱を見て城を捨てるは、弓矢の道にあらず、力無きと

いえども、討死するほかはなし」

と決心した。この知らせを聞いた、公方の旧恩を忘れな

い各武将は、京都からの軍を迎え討つ準備をした。

三月十五日、幕府は上杉清方を大将とする結城攻撃軍を編成する御教書を出した。さらに四月十日、今川範忠らに東征を命じるとともに、関東の諸将にも氏朝攻撃の御教書を出した。同月十九日、管領の清方と上杉持朝は大軍を率いて鎌倉を出発した。七月二十九日、清方、持朝、千葉貞胤らは、諸軍に命じて結城城を包囲させた。小栗助重は、父満重の無念をはらすチャンスがきたことを知り、佐竹一族の下総守の軍に参加し、応永三十年以来四散していた郎従を集め、地理にくわしいのを利用して、結城攻めの先ぼうとなつて活躍した。

一方、氏朝に応じた諸將たちも、幕府からの結城攻撃の御教書を受け取っては、強力な抵抗もできず、次々と降参して結城攻めに参加した。

十二月十二日、氏朝の弟山川氏義は、結城家の断絶を考えて、総大将の清方に書を送って降参した。

嘉吉元年（一四四一）正月一日、結城氏朝は城を出て清方の軍を退けた。しかし、孤立無援の結城軍は力が尽きて、四月十六日に城中から清方に使者を出し

「城には、女子たちが十余人残っている。自分たちは腹を切るから、女たちは助けてもらいまいか」

と交渉した。奇せ手も承知した。

十いくつかのこしが城内から出てきた。戦奉行は「こしをよく調べよ」

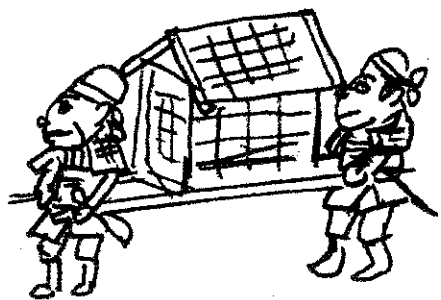
と命じた。軍兵たちは、一つ一つ調べていった。中ほどの二つには十二・三の姫がいた。二人ともやさしい姿でどう見ても姫君であるが、年ごろがあやしい。降ろして調べようとすると、すぐ後ろのこしに乗っていた女房が、転がるように地上に降り立って

「お二人とも、殿の姫君です。あやしい者ではございません」

とり乱した女房の様子がいっそう不審を深めた。身体を調べてみると女ではなくて男だった。まさしく安王と春王の二人なのである。陣中に歓声があがった。

長尾因幡守を奉行として、兵二百人が二人のこしを囲んで京都に護送中、將軍の命令で、五月十六日、美濃国の垂井（たるい）の金運寺で二人の首を切った。

この結果、結城本領は氏義、小栗、伊佐、中村の荘は助重がもらい、助重は三河で世話になった三河貞重に中村荘内七貫文を贈った。



十八 足利成氏と中村荘の人々

ここは、鎌倉にある関東管領の上杉家の屋敷の中、宝徳元年（一四四九）十一月三十日のことである。

今日は、前の関東公方持氏の末子の永寿王の元服の日なのである。永寿王は、結城落城後に捕えられたが、幼少のため命は助けられた。その後も、関東では上杉憲実の不満を持つ諸将が多く、文安二年（一四四五）には、関東の諸将が幕府に永寿王を鎌倉の主人にするように申しこんだ。一方憲実も家老の長尾昌賢（まさたか）の建議をうけて幕府に申しこんだ。それは、永寿王を関東公方にする事によって、関東諸將の心をつかもうとするものであった。

今年の正月、將軍義成（後の義満）は、永寿王と京都で会って剣と馬を与えて関東の主となることを認めた。そして、九月九日に鎌倉に入り、上杉憲実の子の憲忠を管領とし、上杉顕房、長尾昌賢、大田資清らが輔佐することとなった。そして、これらの重臣の前で元服の式をあげ、公方家の慣例



に従って、將軍の一字をもらって成氏と名乗った。

しかし、成氏と上杉家との対立のしこりは残っていて、翌二年四月二十日には、上杉顕房の家老大田資清と憲忠の家老長尾昌賢を大将とする上杉勢が成氏の住む鎌倉府を夜襲する事件が起こった。それを知った成氏を支持する関東の諸將はこの事件を幕府に訴えた。幕府は、前の戦乱のことを考えて十月に使いを鎌倉に派遣して、成氏と憲実、資清、長尾景忠らの上杉勢と和解させ、さらに、翌三年十月には管領憲忠との和解が成立して、成氏の公方としての地位が安泰となった。これを知った結城氏朝の遺子は成氏に仕えて、成朝と名乗るようになった。

翌四年四月二日、成氏は結城家を復興させようとして山川・小栗の領地を成朝に与えた。成氏の処置に驚いた小栗家は管領の憲忠に訴えた。憲忠は顕房、資清、景仲らとともに、成氏の処置の不当を説き、山川・小栗の領地の没収は中止された。一方、結城の旧臣の遺児たちも続々と成朝のもとに集まってきた。

この事件をきっかけとして、公方成氏・成朝と管領憲忠・上杉一族の間は、再び冷戦状態となった。

享徳三年（一四五四）十二月二十七日、成氏は成朝に「お前の家臣に力の強い者はいるか。今日、憲忠が出仕することになっている。門のそばにかくしておいて、憲忠が門を入ったら門を締めてから殺せ」

と命令した。成朝も父のかたき討ちができると思い「はい、承知つかまつりました」とひきうけて、憲忠を家臣に殺させた。

これを知った上杉氏の部将たちは、成氏を討とうとして兵を集めたので、鎌倉の各所で戦いが起こった。翌二十八日、成氏は武田信長と一色直明に命令して上杉持朝を撃たせた。十二月になると昌賢は、越後国から房頭を迎えて管領とし、成氏討伐の準備をした。

翌四年正月、成氏は使いを幕府に派遣して、憲忠の不忠と長尾らの自分勝手なふるまいの様子を報告した。しかし、幕府はその報告を信用できなかった。そこに、昌賢の訴えの使いがきたので、幕府は昌賢の報告を信用して、房頭を大将とする成氏討伐の御教書を出した。正月二十一日、武蔵国の分倍河原で両軍が戦い、成朝は房頭と昌賢の軍を破り上杉憲頭を切った。破れた房頭と昌賢はのがれて小栗城に入った。閏四月、成氏は成朝とともに結城城に入り、小栗城を攻め落とす。房頭は戦いにまぎれて宇都宮等綱をたよった。しかし、成氏の軍の勢が強く、宇都宮城も攻め落とす。等綱は降参して出家入道して、黒衣を着て陸奥の白河に下った。一方、山川、真壁も上杉に味方したが、勝ちめのないことを知り降参した。成氏らは鎌倉にがいせんして、今度の合戦の論功行賞を行った。そして、政国の子の政保は中村荘をもら

い、成朝は冷戦の原因となった領地が自分のものとなった。しかし、成氏の天下は長くなかった。

六月十六日、幕府の命令を受けた駿河守の今川憲忠が、東海道の兵を率いて鎌倉に攻め込んできたからだ。成氏は、鎌倉を逃げだして下総国の古河城に移った。以後、成氏は古河公方とよばれた。七月二十五日に康正と年号が改まり、十二月二十九日に成朝が死んで、子の氏広が結城家を継いだ。上杉軍と成氏軍の戦いは、ともに決定的な勝利をあげることができずに長期化しようとしていた。そこで、房頭と上杉定正は將軍義政に「願わくば、足利氏の一族のだれかを大将として、成氏を討ちとりたい」

と、願い出た。そこで義政は、長祿元年（一四五七）十二月十九日に、弟の政知を鎌倉府の主とした。しかし、成氏を支持する武将も多く、鎌倉に入れず伊豆の堀越に住んだので、堀越公方とよばれた。氏広は、古河公方を守るために結城を留守にすることが多く、古河公方の力が弱まると新恩地は近くの諸將に奪われ、中村も宇都宮領になった。



ここは、結城城の中の政朝の部屋、大永六年（一五二六）のことである。

当主結城政朝と妻方の叔父芳賀弥四郎が話をしている。「叔父上、急なご来城、何のご用件でございますか？」「わしに、お前の力を借してもらいたいが、どうか？」「力をお借しするのはかまいませんが、何にお使いで？」「実は、忠綱のやつが、少しわがままなので、こらしめてやろうと思つてな。どうだろうか？」

政朝は、義兄忠綱と最近反目し合う間になってはいたが、武力を使つてまでとは考えていなかった。驚ろいて、そのわけを聞いた。

「実は、三十年も前のことだが、芳賀家の総領が死んで、後継者がいなかった。わしが芳賀家を継ぐことになった。ところが、芳賀一族の中に、わしが総領となることに反対する者がいて、今の総領の父高勝とわしのどちらかが継ぐことになり、その決定を兄成綱にしてもらおうというこ



水谷軍が攻めてくると、射手に一せいに矢を射させた。水谷軍は、この急襲に旗を巻いて退いた。玄角の子小太郎時長は勝ちに乗じて追いかけたが、水谷軍が下館城に引きこもつたので、ときをあげて帰城した。

その夜は、始めのうちはよい月夜であったが、雲が出て雨が降りだした。中村軍は、水谷軍を追い帰した勝利の祝杯をあげて寝た。一方、治持は、雨の音にまぎれて二百余騎を率いて、中村城を遠巻きにして、いっせいにときをあげて、中村城におし寄せた。

ときの声に眼をさましたのは、大将の玄角である。「みなもの者、夜襲じゃ。あわてずに仕たくせよ」と、大声で命令しながら、すばやく身じたくをする。家来たちも各々身じたくをする。玄角は敵勢を見ようと築地に登って見渡すと、暗くて水谷軍の数はわからないが、正門と裏門から攻めこもうとしている。急いで家来たちを向かわせようとしたが、雨にぬれた石で足がすべり、頭を打って即死してしまった。時長は、家来に守られながら裏門の水谷軍の中を通過して宇都宮についた。これを知った忠綱は、結城との合戦に備えて家来を召集した。

とに芳賀一族の者たちが決めた。ところが兄は、建高を総領とすると決めた。わしはそれからずっと今まで、芳賀の居さうろうぐらした。兄の死んだときに、どこかの領地でも分けてくれるかと思つたが、忠綱のやつ、どこかの領地もくれない。さらに最近になって、わしを宇都宮家の一族として扱わなくなった。どうだろう。長幼の序も忘れるような主では、いずれ外の諸將にたおされてしまふだろう。それよりは、一族のわしと親類のお前、忠綱をこらしめてやろうと思つてどうか？」と話した。政朝も、何度か宇都宮家の危機を救っているが、義兄の考え方は、家来の中から外の武将につく者がでるかもしれない。そうならば、宇都宮家はたおれてしまふだろう。それよりも、一族の者が総領になるのなら、家来たちもそれほど不満はないだろうと考えた。そこで、弥四郎の頼みを聞くことにした。

十月十五日、政朝は下館城主の水谷治持をよんで「父氏広のときに失なつた、中村荘を回復せよ」と命令した。治持は、すぐに下館城に帰り

「十七日に出陣する。城に集合せよ」の命令を家来たちに出した。

十七日、集まつた二百余騎を率いて下館城を出発した。中村城を守る中村玄角は、下館軍の攻撃を聞き、すぐに家来を集めた。集まつた二百騎で迎えうつことにした。

十二月六日、政朝は治持を先陣として三千余騎を率いて宇都宮領に入った。一方忠綱も二千五百余騎を率いて出陣し、両軍は河内郡の猿山で対陣した。弥四郎は、チャンス当来とばかり、自分を支持してくれる芳賀家の家来とともに宇都宮城に入り、各門を芳賀から連れてきた人々に守らせ、今まで各門を守っていた人々を集めて「わしが、忠綱に代わつて宇都宮城主となる。不満に思う者は、直ちに忠綱のところに行くがよい」と言う。最近の忠綱の行動に不安を持っていた人々は、弥四郎を主人とすることに同意した。猿山の合戦に破れた忠綱が、宇都宮城に入ろうとして

「忠綱様のご帰城」と、開門させようとしたが

「お城は弥四郎様のもの」と言つて開門しない。忠綱はやむなく、鹿沼の壬生綱雄を頼つて行った。

弥四郎は興綱と改名し、中村十二郷を結城氏に譲つた。政朝は祖先の旧地を回復してきたので、治持に、十二郷の中、中・大沼・茅堤の地を与えた。



ここは、中村荘内の水谷家の領地の中で、元和元年（一六二二）十一月のことである。

一人の武士が、それぞれ同じ長さの棒と、縄を持った足軽たちを連れてやってきた。この武士は、領主水谷勝隆の郡奉行で、足軽たちは、その配下の者である。武士は秋の取り入れの終わった農民や名主に迎えられた。

武士は、出迎えに出た名主や農民たちに

「治持様の時から約百年ほどたっている。その間に土地の耕作者も代わったことだろう。そこで今度、今所有している耕地と耕作している耕地を

書き出させることになった」

「へい、承知いたしました」

「書き出しが本当であるかどうかを調べるから、田畑を隠さないように、田畑の等級も書くようにせよ。また、新田・新畑も忘れぬようにせよ」

「それを、どうなさるので」

「田畑の耕作者をはっきりさせて、この検地帳に記録する。記録された者は、一人前の農民とする」



「これはありがたい。前々から、一人前になりたいと思っていた。これで一人前になれるぞ」と、耕作農民たちは、お互いに話した。すると、土地持ちの一人の農民が、おそるおそる

「お願いいたします。わしらの田畑がねらわれては困ります。わしらが承知しないときは、その田畑をほしがらねえようにして下さい」

「よし、よし、わかった。お前の申すとおりでよい」

村人たちは、自分の耕作している田畑の面積と等級を書き出した。武士は、それと村絵図を見ながら、田畑を一つ一つ測量して確認していった。そして、田畑の測量が終わると、八幡宮の境内まで測量をしようとした。名主はあわてて、郡奉行に

「八幡宮は、伊達様の氏神でございます。伊達様にお聞きになってからにはいかがでしょう」

「そのような心配はない。例え、伊達家の氏神でも、今は、わが領主の領地内であるから、横やりはてまい」と言って測量をすすめ、水谷家の石高として書き入れ、さらに、遍照寺の境内まで測量しようとした。名主は

「遍照寺は、寺伝によりますと、暦応四年（一三四一）に尊氏公のお子義のり公がお建てになり、その後は、足利家の祈願寺として、成氏・政氏公の書状もあります。先代正村公が、天文十三年（一五四四）に茅堤からこの

地にお移しになったのですから、ご領主様にお聞きにな

ってからにはいかがですか」

と、とめたが、聞かずに測量をすすめて書き入れた。

そして、翌寛永元年（一六二四）正月、八幡宮の氏子の代表が集まった。このとき中村の名主が

「去年の検地の結果、田畑の耕作権は認められた。しかし、年貢として収穫高の四割を納めること、それに、家屋敷も田畑と同じように年貢を納めることになった。鎮守様の境内も年貢を出すことになったよ」

「そりゃあ大変なことだ。鎮守様の境内に作物を植えるわけにはいかねえ。鎮守様の石高が五石じや、神主様が食べるにも足らねえ。お社がこわれたときはどうする」

「どうするって、言ったって。おれたちだって、お社の修理にどれだけ出せるかわかんねえぞ」

「今のうちに、なんとかしないと、お社が壊れたときに直せなくなるぞ。何かよい方法はないか」

「どうだろう。境内に杉の苗を植えておいて、修理するときに切って、それで直すのは」

「それはいい。今年の秋は、みんなで少しずつ米を出して杉の苗木を買って植えよう。そして、杉の木は建物を修理するときにだけ切るよう、神主様にお願ひすべえ」

「それにしても、今度の殿様は罰当たりなことをする。鎮守様の境内まで縄入れするんだから、こんなまうすじ

ゃ、いつ領地替えになるかもわからねえな」

「次の領主様が、よい領主様であるように、鎮守様にお願ひしようではないか」

こんな相談が氏子の代表の間できまり、その年の秋の収穫の中から、みんなが少しずつ米を出しあい、それを売って杉の苗を買い、翌二年三月に八幡宮の境内に植えて、社殿の修理代にすることにした。

それから十五年後の寛永十六年六月五日、水谷家は備中国（岡山県）成羽に領地替えになった。そして、翌十七年の秋に、新領主松平頼重（よりしげ・水戸黄門の兄）の郡奉行の鈴木伊兵衛が、米のできぐあいを見に来た。

八幡宮の神主野口新左衛門は伊兵衛に会って、

「本宮は、伊達様ゆかりの神社でございます。伊奈様から五石の御朱印状をいただいておりますが、水谷様のご検地で境内に縄入れされました。できますことなら、境内を免

税地にしていただきたい」

と願ひ出た。そして、境内の免税を神社領五石の書状が、十一月十五日に鈴木伊兵衛からとどいた。



ここは、中村の名主の家の中、慶安二年（一六四九）の三月初旬のことである。

名主の家には、今夜集まるように言われた農民たちが、何事かと心配しながら続々と集まってきた。

そのころの名主は、検地帳の上で田畑や屋敷を持ち、それを経営して田畑・屋敷の年貢を納め、そのうえ労働賦（ぶ）役を一人前にできる者の中から選ばれた本百姓である。また、補佐役の組頭も同じ本百姓から選ばれた。

名主の主な仕事は、年貢の納入、村中の土木工事、戸籍の調査、土地の売買と質入れの証印、宗門改め、村民の訴えの奥印などのほか、村民の生活上の世話もした。このほかに、名主や組頭のやり方を監視する百姓代がいた。百姓代は、自分の田畑を耕す本百姓の代表である。

名主の家の中には、座敷にすわれる本百姓と、土間にむしろをしいてすわる「水のみ」といわれる小作人がすわっていた。みんながすわると

「いいか。これは、われわれ百姓にとって大事な事だから、よく聞いておれよ」

名主は、二月二十六日に出された「郷村勸農法度」の内容をわかりやすく言い直して読み始めた。

◎ 百姓は朝早く起きて草を刈り、昼間は田畑をよく耕

し、夜は縄をない、俵を作る仕事に精を出せ、酒や茶を買って飲んではいけぬ――

「そんなこと、ちゃんとしてるでねえけ」と、小さな声で水のみ一人が言った。

◎ ふだんはなるたけ麦・あわ・ひいなどの雑穀を食べるように。ただし、田畑起こし・田植え・稲刈り、また、骨のおれる仕事をするときは、

ふだんよりも少しよい食べ物にするようにせよ。しかし、

秋にとれたからといって、米や雑穀を余り食べすぎないよ

うにすること。正月から三月までは作物がなくなるのだから、食いつぶさないようにすること――

「とんでもねえ。そんなに食ったことがねえ」

「一度でいいから、腹いっぱい食ってみていよ」

と、本百姓のだけれど、小さな声で言った。

◎ きさんのときを考えて、ダイズ、ササゲ、イモの葉な

から、借りないように心がけよ。雑穀を売るときも考えて売るようにしなさい――

「売るほど余ればいいな」

と、小声でつぶやく者が多かった。だれも苦しいようだが、

◎ 何事にもよく気をつけて、一生けん命に働けば生活が楽になる。生活が楽になったからといって、むやみに

取り上げることはしない。天下太平の御代だから、外の

の者が取り上げることもないはずだ。だから、子孫まで

豊かに暮し、世の中がききんの時も、妻子や召し使いら

も安心して暮すことができる。年貢さえ納めてしまえば、

百姓ほどのん気な者はない。よくよくこのことを心にと

留めて、子供や孫の代まで申し伝えて、一生けん命に働

くことを忘れるな――

「まあ、だいたい、以上のようなことだ」

名主は一息つきました。「なるほど。年貢さえ納めてしまえばか」

「その年貢がなあ」農民たちは、このおふれの後で、どんなことになるかと心配しながら、三々五

五、自分の家に向かった。



ども、かんたんに捨てないようにするこ――

◎ くらしに困る者は、子供が多ければ人にくれてやったり、奉公に出すこと。きれいな女房でも、夫をそまっ

にしたり、大茶を飲んだり、物参りや、遊ぶことの好きな房は離婚してしまえ――

「くらしに困るのは、年貢が高すぎるからだ。かわいい子供を人になんかくれられるもんか」

「とんでもねえ。離婚したくても女房のいねえ者が、どうやってするだ」

百姓たちは、ガヤガヤとさわがもくなった。「うるさいぞ。静かにしないか」

◎ 秋の取り入れが終わったら、その中からよいもみを選んて種とし、正月十一日までに農具の手入れをしておくように。また、肥料が大切だから便所を大きく作って

雨が降っても水が入らないようにし、馬や牛をかってこ

きだめをほって草を入れ、どぶ水を注いで肥料を作れ、

そのためには、庭をきれいに南向きにするように。また、田畑作りのうまい者によく聞いて、それぞれの田畑にあ

ったよい種をまけ。麦田も作るようにせよ――

「そんなことは、とっくにしているよ」



ここは、中村にある勝瓜用水の近くの水田で、元禄三年（一六九〇）の冬のことである。

農民が作物を作るのに必要なものは、天候と土地と水です。このうち、天候は人の力ではどうにもならないが、水を確保するために、むかしからいろいろ工夫をしてきました。水の流れる堀を用水路とよんでいました。

中村を流れる用水路は二つあります。一つは、勝瓜のびわほうから取る勝瓜用水、一つは、中里の上河原から取る大井口用水です。

勝瓜用水は、始めは大沼にあった沼から水を取っていましたが、荒地を開墾する者が増えてきて、沼から引く水だけでは足りなくなってきたので、鬼怒川の水を勝瓜から引くようになりました。そして、残った水は大井口用水に流れこみます。

大井口用水は、水谷正村が天正年間に下館領の村々の水不足を補うために造ったもので、水谷家、松平家が下館城から離れると、用水を使う四十四カ村が組合を作って用水路の修理をす



るようになった。四十四カ村のうち六カ村を東方、九カ村を西方、残りの二十九カ村を中郷とよんでいました。

雨宮勘兵衛代官から若旅の名主次兵衛の家に、用水路の修理日を知らせてきた。次兵衛は、組頭の文右衛門、伊右衛門、伝兵衛らと相談して、各人の役割りを決めて五人組に知らせた。（五人組とは、本百姓五軒が一組となって年貢の完納、治安の維持などの責任をもつ組）

農民は大切な用水のことなので、一軒残らず集まった。代官所の手代を始め、西郷家、小田切家、遠藤家、板倉家の人たちがいた。各村の名主は、手代のところに行つて、仕事の割りふりの名簿を渡した。手代は大声で

「取り入れ口の関を直す者は、若旅村の徳左衛門のせがれ長五郎、半左衛門の孫孫七、庄次郎、市左衛門のせがれ長助、五郎右衛門、寺内村の……、長田村の……」

と、各村から五名ずつ計五十人の名がよばれた。取り入れ口の関は、ほかの関と違って、舟の上から仕事もするので力仕事でした。五十六歳の五郎右衛門は

「用水路の修理のときは、いつも取り入れ口だ」と、つぶやいた。今年初めての長助が

「とっさまも、いつも取り入れ口だと言っていたが、そんなに大変な仕事なんですか」

「そりゃ大変だよ。まず、竹のかごに頭ぐらいの河原の石を入れる。それができたら、舟に乗って取り入れ

口まで運び、それを舟から下ろして積むんだ」と、庄次郎が説明した。

「なぜ、おれらんちばかりなんだね」

これも今年が始めての孫七が不思議そうに聞いた。

「そりゃあな。おれたちは田畑が少なえだろう。だから、名主様や伝兵衛どん、文右衛門どん、源兵衛どんとこの手伝いをすることもあるし、年貢を助けてもらうこともある。外の人だと文句がでるからなあ」

五郎右衛門は、半ばあきらめたように言った。

「そう言うなよ。おれたちの仕事が一番大切なんだ」と、庄次郎が若い者の不満をやわらげるように言った。

鬼怒川の中州に渡ると、庄次郎や五郎右衛門などの四十歳以上の者は竹かご作り、四十歳未満の者はもっこて頭ぐらいの石を運ぶ仕事に分かれた。今年始めて竹かご作りになまった者は、なたをかけやて打って竹を割る。年配の手慣れた者は、割った竹でかごを編む。かごに石を入れる。一つ、また一つと竹かごができあがる。てきあがると、五く六人で舟に積みこむ番だ。

「舟を浅瀬につなげ。気をつけてやれ。けがするな」

「よいしょ。よいしょ」

声をそろえて、冬の冷たい水に入って竹かごを舟に積みこむ。四く五く積みこむと舟を取り入れ口の近くに運ぶ。これからが大変なのだ。下手をすると舟がひっくりかえる。少し

ずつ竹かごを川の中に入れて関を造る。みんな真剣な顔だ。やっと竹かごが積み終わった。

「できあがったぞー」

と、舟で仕事をしていた者がどなった。中州で火にあたっていた手代が別の舟に乗って関の所まできて

「よし、今年は良くできたぞ。これなら、少しぐらい水が増えても大丈夫じゃ。ご苦労、ご苦労」

と、竹かごの積み具合を見て言った。そして、舟を中州にもどし、火のそばによった。

一方、堀さらい組では

「おい、おい。あんまり深くさらいすぎるなよ。せっかくすいたねん土がけずれぞ」

「うんだあ。水がしみねえように気をつけろや」

だが、だれも文句を言わない。堀さらいをサボレば、村にくる水の量が減るからだ。といってほり過ぎれば水がもる。堀の底のねん土をけずらないように注意しながらの仕事だ。

堀さらいの仕事は、気をつかいながらの作業なので、けっこう疲れる仕事だ。



ここは、若旅の名主次兵衛の家、元禄五年の秋の取り入れが近いころである。

代官所の手代が、今年の田のつき具合を見にくる、というしらせが入った。名主の次兵衛は召し使いたちに「酒や魚の用意をしる。みやげはなににしよう。中村や上大沼の様子を聞いてこい」

名主の家の中は、外の村の様子を聞きに行く者、酒や魚の用意する者。泊まる座敷の掃除をする者、火事にあつた家のように家の者がでてこまいである。

「さてと。だれの田んぼがいいかな。あまりてきのよくない田は、だれんどの田だったかな」

手代は着くと、すぐに田の

様子を見に行くと言った。次

兵衛は、あまりてきのよくない

田の間を通りながら案内し

た。手代は、てき具合を見る

心得を思い出しながら

「検見（けみ・てき具合を見る）の虎の巻、稲の葉をかく

す時は上作か。不作の時は、

わらたばを見せるだな」



「ご手代様、何かおっしゃいましたか」

「いや、なんでもない。それ、その田が実っているよ

うじや。刈ってみよ」

持ってきた「さお」を次兵衛の召し使いに渡した。

手代の見ている前で、さおの長さの四角をかき、稲を

刈ってたばね、それを持たせて名主の家にもどった。

座敷には、酒の用意ができていた。手代がすわると、

次兵衛は酒をつぎながら

「いなかのことで、何もございませぬ。ほんのお口よこ

してございますが、どうぞおめしあがり下さい」

「いや。だれでも生きねばならんからな」

と、手代は庭で刈り取ってきた稲束から、もみをこき落

として、もみをすっているのを見ながら言った。

「米になりましただ」

「では、これではかってみよ」

と、手代は持ってきたますを渡す。ますで数えた。

「今年は、ややてきが悪い程度だな。昨年と同じだ」

これで年貢が決まった。あとは納入するだけだ。

十一月、収穫も終わり、いよいよ年貢の納入だ。五人

組ごとに集めた米を、名主の次兵衛、組頭の文右衛門、

伊右衛門、伝兵衛が立ち会って、品質を調べてから、ま

すて正確にはかって米俵につめてから、重さをはかった。

それから、嚴重に俵ごしらいをした。次兵衛が

すぐに連絡し、川運送のきまりによって弁償する。

と、いうものであった。約束の中に船賃がないのは、天

領の年貢米の船賃は幕府側が支払うためである。

各村の年貢米は、河岸までは村々が責任をもって運ぶ

ことになっているので、次兵衛は十一月十四日に家を出

て三里川下の小川河岸問屋の与惣兵衛の行き、上谷貝の

善四郎とともに、十六日から各村々の年貢米の納入に立

会った。そして、各村々の年貢米がそろったので、十一

月二十八日に船出をして十二月十七日に江戸浅草蔵前の

市左衛門の蔵に七カ村の年貢米七百六十九俵二斗八升（

本年貢米分七百五十五俵と余分の米十九俵二斗八升）を運

び込んだ。そして、年貢米の品質を調べるために、百六

十九俵から一斗七升を取ったので、それを足した。それ

に十七日から二十日まで

の次兵衛と善四郎の費用

二斗四升をぬいた残り、

十二俵二斗四升を市左衛

門に三両一分と錢一貫五

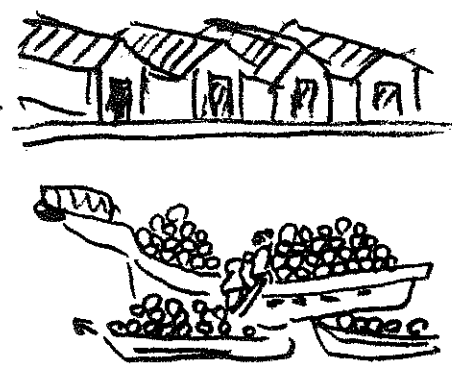
十五文で売った（一両で

一石四斗三升、一両は錢

四貫六百五十文）その他

の支出の明細を書き、手

代が証明した。



- 1、納入者と問屋が立会いの上、米の品質を改め、目方を量ってから船に積み込む。
- 2、浅草蔵前でまちがいなく納入者に米を渡す。
- 3、米がぬれたり、量が不足したときは弁償する。
- 4、風雨のために船がこわれて米を失ったときは、

「今年は、寺内、若旅、上大沼、長田、柳林、砂ヶ原、上谷貝の七カ村を代表して、わしが納入しに行くんだから、きちんとしてくれろや」

「はい、わかりました。でも、今年はどうございましたな。昨年年みなので、冬場に河原の開墾ができません」

「本当だ。冬の間、町へ行って賃仕事をしなくちゃ、食いねえほど取られちゃ、田も広げられねえからな」

「うんだ。うんだ。おれたちが新田を作りゃ、十年先には、年貢が増えるんだ。少しずつでも大きいよな」

「お役人様の考え一つだな。まだまだ荒地があるんだから、役所の費用で開くよりよかっぺいに」

と、年貢米の俵作りをしながら、冬の仕事のことを話します言葉も、年貢が納入できた安心して明るい。

年貢米の納入についての形式は、名主から代官あてに、「積送り申す御米の事」と書きをし、中に「御蔵米何俵、新造船（能き船）だ〇〇河岸にて積立て、〇月〇日に出船、江戸到着〇月〇日、御改め、請取らるべく候」と書くことになっていた。河岸問屋と納入者との約束は、

ここは、大沼の渡し場、享保十三年（一七三八）四月十九日のことである。

大沼の名主を始め、多くの農民たちが向こう岸を見ている。このたびの助郷（宿駅の仕事を助ける役）で、日光社参に行った人々の帰りを待っているのである。

向こう岸に、馬を引いた四人の姿と、がっしりとした体つきの四人の姿が見えると

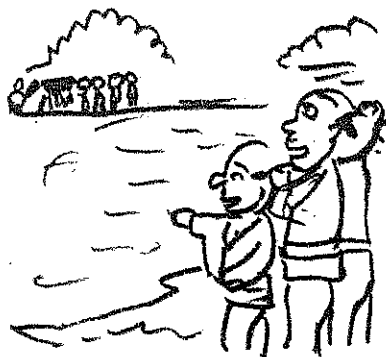
「みんな無事のようだ。よかった。よかった」

と、待っていた名主が胸をなでおろしながら言った。渡し舟の舟頭も、今着いたばかりの舟をこぎだした。

助郷に行った人々が、舟からあがってくる

「ご苦労。ご苦労。おかみの仕事だて、大変だったろうな。これは、今度の費用だ。受け取ってくれ」

と、名主は言いながら、馬を引いて行った者、体一つで行った者に一人一人銭を渡していった。このころの男一人の一日の日当は、四十八文で、そのほかに食費



りて、家の中の様子はよくわかんねえが、家はしっかりした建て物が多かったようだ。と、自分の家が少しかたむいていても直せないの思い出しながら言った。

「日光って、どんなところや」

「日光は、神君様（徳川家康）のお墓所だて、立派な宿屋が多

かったし。太い杉の木も多かったな」

「そんなじゃあ、次の助郷の時、おらが行くかな」

などと、勝手なことを言う者もいた。

「とんでもねえ。助郷なんか、まわってこねえほうがいいんだ。費用を出すのが大変なんだ」

と、名主はみんなに言った。

助郷が割り当てられると、百石について馬二頭と人足二人を出さなければならぬ。二日分の割り当てとして、往復に二日かかるので、四日分の費用となる。この費用を村の全員で負担しなければならぬのである。また、助郷のあった年には、高掛り三役という年貢の付加税は免除されるが、免除分より出費の方が多かった。高掛三役というのは、伝馬宿入用米（百石で六升の割）と六尺給米（百石で二斗の割）と蔵前入用（百石で永二百

として米九合分と塩。みそ代、宿泊費として十七文、そのほかにわらじ銭と小遣いがもたらされた。また、馬は一頭について、えさ代として百四文をもらった。

みんなは、待ちかねたように

「仕事はどうだったね」

と聞くと、馬を引いて行った者が

「とても気持ちよかったな。先ばらいの人が、下におろう、下におろう、といばっていくし、わっしらは、あとから荷物をつけた馬を引いて行くだけだから、土下座する必要がねえ。土下座している人の前を歩くなんで、始めてだもんね」

「そんなに、気持ちがいいもんかい」

「うん。荷物といたって、軽いものだし、歩くのもゆっくりだから楽なもんだよ」

と、体一つで行った者が答えた。

「何人ぐらいのお供だったね」

「そりゃあ、すごい数でございますよ。おれらには数えきれねえほどで、おれらみたいに助郷の者を加えると、八万人余だ。ちゅう話だ。江戸からきた馬が三千頭以上もいた。ちゅうことだ」

「途中の様子は、どんなだったね」

「道の両側には、杉がならんで植えてあるところが多かったし、宿場の家は雨戸を開けたり、すだれを下ろした

五十文の割）である。

このたびの助郷は、去年の十一月五日に、八代將軍吉宗が日光に今年の四月に参拝することになった、と老中から伊奈半左衛門忠道代官に知らせがあり、代官から十五日に、徳次良（宇都宮市の町名）の問屋と年寄りに、老中の命令書の写しが送られ、問屋と年寄りは、その写しを写して割り当てられた村々に伝えた。

その写しには、各村々の石高が書かれており、千石について才料（人足の指導者）二名を出すことと、人足は病身の者と六十歳以上の者と十五歳以下の者を除くように、と書かれ、そして、石高などに間ちがいがあれば、伊奈代官まで申し出ること、これでよければ、別帳へ名主、年寄りの請印をおして返すように書かれていた。

そして、今年の三月になると、伊奈代官から、助郷に出る馬には、国都村名と持ち主の名前を書いた木札を両側にいもがらでつけること。また、人足として出る者も、国都村名と名前を書いた木札をつけるようにすることなどのほか、衣服なども、ふだん着のまま出てくるように、などと細かに命令している。



ここは、中村のある農家の縁側、天明四年（一七八三）の初冬のころで、収穫も終わったある日である。

二人の老人が去年のことを思い出して話をしている。

「今年は、まあまあ年貢米が納められそうだな」

「うん。去年はひどい年だったな。作物はなんにもできねえし、食う物はろくに残ってないねえ。それでも、なんとか食いつないだ。今年の二月が一番ひどかった」

「今年はまだまあだが、来年はどうだろうか。なんでも、米將軍様（八代吉宗）のころから（享保元年・一七一六）に將軍となる（日本はうえの時代になってきたと、うちのじいさまが、言っていたのを覚えてるよ）」

と、来年のことを心配して言った。

「今年の冬はどうかな。一

「今年の冬は気候がおかしかったよな。真冬に菜の花がさき出し、竹の子が生え出すあたれかざだったのが、悪かったんだなあ」

「うん。そうだ、そうだ。」



春はなったら逆に寒くなって、五月一日から雨が降り出した時は、つゆがあげれば暑くなると思っただよな」

「そうだよ。だれもそう思っただよ。でも、五く七の三ヵ月間に、晴れた日は十八日しかなかったよ。それで、五月中は火にあたり、あわせを着るほどだったな」

「六月十六・七日の雨は、ひどい大降りだったよ。孫の誕生祝いに行くのに苦勞したんで、よく覚えてるよ」

「そうよな。去年は春から地震が起り始め、毎日のように地震があり、六月二十九日からは、特に強くなったな。たなに乗せた物がやたらと落ちて困った。あの地震は、浅間山で起こったそう。あの時は、西の方で稲妻（いなずま）のような炎が見えた。おらあ、あの時は、この世の終わりだと思っただよ」

「そうだ。そうだったよな」

「七月四日からは、煙が空一面に広がって、毎日雷のよな音がした。そして、五日からは青色い灰が降り出した。おらあ、六日の朝に庭を見て、雪が積もったかと思っただよ。木の枝はもろろん、庭一面が真っ白だった。はかってみたら二く三寸（六く九センチ）もあった。そして、昼過ぎから、二十く四十匁（もんめ）七十五く百五十グラム）の小石が降ってきた。あぶなくて歩くことができねえし、やみ夜のように人の顔が見えなかった。けなあ。本当にこわかったよ」

「そうだ、そうだ。あの夜は、地震で家がつぶれるんじ

「あねえかと思っただよ。外に出ようと思っただよ、あの石降りじゃ出られねえし、こもを用意したりして、せんせん寝られなかったけな」

「なんでもあん時、名主様は雷除けのたいこを、たたきに行きなされた。う話だせ」

「うん、うん。そういう話だ。そのおかけかな、八日には、少し晴れたけ」

「でも、そのあともひどかったな。夏だっっちゃうのに、あわせや綿入れを着てなくちゃ、寒くていられなかったんだよな」

「せっかく植えた苗は、全部だめになっちゃったけ」

「代官様をお願いして、年貢は全部免除になったが、そのあとがつかったな。いくら残っていたひえやあわもなくなるし、山の木の実もろくにならなかったし、食べられる草もろくに育っていかなかったからな」

「なんでも、奥州のほうじゃあ、太部死んだそう」

「あっちこちで、米よこせの動きがあったらしいな」

「うん、そのとおりだ。代官様から徒党を組んじあならねえ、仲間を集めて入らない者の家を焼いたり、打ちこわしをしてはなんねえ。頭だった者を捕える。無理ならば住まいや名前を知らせる。わからなければ一打ちこわせーとか一火をつけろーと言った者を知らせると言っ

きたんだから、外のところじゃ、起こったんべ」

「十一月のころに手代様がきて、用水堀の灰さらいや鬼怒川の土手の修理の仕事をおかみの手でする、といっ

て、おれたちは手間賃をもらえたので、なんとか食いつなげたんだよな。でも腹がへってつらかったな」

「つらくても、仕事があったから、うえ死しねえですんだんだ。なんでも、今年の二月に真岡じゃあ、食べ物

「手代の幸助様はえらい人だよ。食べ物くれをいった人たちを徒党とせず、とが人を一人も出さなかった」

「おかけて、わしらも助かったよな。一ヵ月分一人当たり百文ずつ貸してくれたうえ、一日に大人二合、年寄り

と子供は一合を、一両で一石と三斗の割りて貸してもらえたんだからなあ」

「そうだ。あんときは、一両で米三斗八升の値段だったから、町の値段の三分の一くらいで借りられたからな」

「でも、だいぶ借りたから、来年からうんと働いて返さなくっちゃあ」

話は、まだまだ続きます。

